

基本計画書

基 本 計 画 書								
事 項	記 入 欄						備 考	
計 画 の 区 分	学部を設置							
フ リ ガ ナ 設 置 者	ガッコウジツメイガク 学校法人 明星学苑							
フ リ ガ ナ 大 学 の 名 称	メイセイガク 明星大学 (Meisei University)							
大 学 本 部 の 位 置	東京都日野市程久保2丁目1番地1号							
大 学 の 目 的	<p>明星大学は、設置者である学校法人明星学苑の建学の精神である「和の精神のもと、世界に貢献する人を育成する」に基づき、広い教養と深い専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、自己実現を目指し、社会に貢献する人を育成することを目的とする。この目的を実現するための教育研究の成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。</p>							
新 設 学 部 等 の 目 的	<p>(経営学部の目的) 経営学部では、経営学の理論と経営実践との融合を図り、広く豊かな教養と視野を身につけさせ、専門的知識・技能を育成することにより、グローバル化する国際社会の厳しい経済環境の中で、経営の諸問題に対して主体的に考え、正しく判断する能力と経営の専門性を発揮する能力を兼ね備え、企業等の経営に携わることにより自己実現を目指し、社会に貢献する人間性豊かな人材を養成することにより、明星大学の「教育目標」を実現する。</p>							
新 設 学 部 等 の 概 要	新 設 学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	収 容 定 員	学 位 又 は 称 号	開 設 時 期 及 び 開 設 年 次	所 在 地
	経営学部 [School of Business Administration]	年	人	年次 人	人		年 月 第 年次	東京都日野市程久保2 丁目1番地1号
	経営学科 [Department of Business Administration]	4	200	-	800	学士(経営学)	平成24年4月 第1年次	
	計		200	-	800			
同 一 設 置 者 内 に お け る 変 更 状 況 (定 員 の 移 行 , 名 称 の 変 更 等)	<p>明星大学 平成24年度より入学定員の変更 経済学部 経済学科 [定員増] (20)</p> <p>造形芸術学部 造形芸術学科 [定員減] (60)</p> <p>平成24年度より学生募集の停止 経済学部 経営学科 (廃止) (160)</p>							

教育課程	新設学部等の名称		開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
			講義	演習	実習	計				
	経営学部 経営学科		172科目	79科目	1科目	252科目	124単位			
教 員 組 織 の 概 要	学部等の名称		専任教員等					兼任 教員		
			教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	新 設 分	経営学部 経営学科		9 (9)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	7 (3)
		計		9 (9)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	7 (3)
	既 設 分	理工学部 総合理工学科		30 (34)	19 (20)	2 (2)	0 (0)	51 (56)	0 (0)	60 (60)
		人文学部 国際コミュニケーション学科		7 (7)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	16 (16)
		人文学部 人間社会学科		5 (5)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	9 (9)	0 (0)	13 (13)
		人文学部 心理学科		6 (7)	3 (3)	1 (1)	1 (0)	11 (11)	0 (0)	28 (28)
		人文学部 日本文化学科		6 (6)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	10 (10)
		人文学部 福祉実践学科		5 (5)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	18 (18)
		経済学部 経済学科		15 (15)	3 (3)	4 (4)	3 (3)	25 (25)	0 (0)	18 (18)
情報学部 情報学科		9 (9)	9 (9)	1 (1)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	21 (21)		
造形芸術学部 造形芸術学科		7 (9)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	12 (14)	0 (0)	33 (33)		
教育学部 教育学科 教育学部 教育学科(通信課程)		30 (37)	25 (25)	0 (0)	3 (3)	58 (65)	0 (0)	45 (49)		
全学共通教育		22 (22)	8 (8)	2 (2)	1 (1)	33 (33)	0 (0)	104 (104)		
計		142 (156)	85 (86)	11 (11)	11 (10)	249 (263)	0 (0)	366 (370)		
合計		151 (165)	92 (93)	11 (11)	11 (10)	265 (279)	0 (0)	373 (373)		
教員以外の職員の概要	職 種		専 任		兼 任		計			
	事 務 職 員		161 (161)		73 (73)		234 (234)			
	技 術 職 員		6 (6)		1 (1)		7 (7)			
	図 書 館 専 門 職 員		10 (10)		0 (0)		10 (10)			
	そ の 他 の 職 員		7 (7)		13 (13)		20 (20)			
計		184 (184)		87 (87)		271 (271)				
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計				
	校舎敷地	212,455m ²	0m ²	0m ²		212,455m ²				
		721,474m ²	0m ²	0m ²		721,474m ²				
	運動場用地	74,314m ²	0m ²	0m ²		74,314m ²				
		94,320m ²	0m ²	0m ²		94,320m ²				
	小 計	286,769m ²	0m ²	0m ²		286,769m ²				
		815,794m ²	0m ²	0m ²		815,794m ²				
その他	0m ²	0m ²	0m ²		0m ²					
	0m ²	0m ²	0m ²		0m ²					
合 計		1,102,563m ²	0m ²	0m ²		1,102,563m ²				

大学全体

- ・ 日野校
- ・ 青梅校
- ・ 日野校
- ・ 青梅校
- ・ 日野校
- ・ 青梅校

大学全体

校舎		専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	・日野校 ・青梅校 大学全体				
		164,392㎡ (164,392㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	164,392㎡ (164,392㎡)					
		32,714㎡ (32,714㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	32,714㎡ (32,714㎡)					
合計		197,106㎡ (197,106㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	197,106㎡ (197,106㎡)	大学全体				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	・日野校 ・青梅校 大学全体				
	88室	163室	194室	19室 (補助職員 8人)	2室 (補助職員 3人)					
	23室	8室	36室	1室 (補助職員 2人)	0室 (補助職員 0人)					
	111室	171室	230室	20室 (補助職員 10人)	2室 (補助職員 3人)					
専任教員研究室		新設学部等の名称		室数						
		経営学部 経営学科		17室						
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用分 図書：627,948冊 (202,532冊) 学術雑誌：8,295種 (2,727種)		
	経営学部 経営学科	60,977 〔20,887〕	664 〔263〕	69 〔69〕	53 〔13〕	335 (335)	0 (0)			
	計	60,977 〔20,887〕	664 〔263〕	69 〔69〕	53 〔13〕	335 (335)	0 (0)			
図書館	面積		閲覧座席数		収納可能冊数		・日野校 ・青梅校 大学全体			
	16,865㎡		1,180席		1,526,000冊					
	4,343㎡		292席		363,000冊					
	21,208㎡		1,472席		1,889,000冊					
体育館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要					・日野校 ・青梅校 大学全体		
	8,006㎡		野球場、テニスコート							
	4,928㎡		野球場、テニスコート							
	12,934㎡									
経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	共同研究費等は 大学全体	
		実験系		600千円	600千円	600千円	600千円	-		-
	その他		400千円	400千円	400千円	400千円	-	-		
	共同研究費等			40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	-	-	
	図書購入費		45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	-	-	図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費(運用コスト含む)を含む。
	設備購入費		40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	-	-	設備購入費は 大学全体
	学生1人 当り納付金	学部	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
		経営学部	1,200千円	950千円	950千円	950千円	-千円	-千円		
		理工学部	1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	-千円	-千円		
		人文学部	1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	-千円	-千円		
教育学部		1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	-千円	-千円			
教育学部 (通信課程)		144千円	114千円	114千円	114千円	-千円	-千円			
経済学部		1,200千円	950千円	950千円	950千円	-千円	-千円			
情報学部		1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	-千円	-千円			
造形芸術学部	1,750千円	1,500千円	1,500千円	1,500千円	-千円	-千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			手数料収入及び資産運用収入をもって充当する。							

大学等の名称	明星大学								所在地		
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度			
既設大学等の状況	(学部) 理工学部	年	人	年次人	人		1.07		東京都日野市 程久保2丁目1番地1号	平成22年4月より 学生募集停止 (物理学科・化学科・ 機械システム工学 科・電気電子システ ム工学科・建築学科・ 環境システム学科)	
	総合理工学科	4	400	-	800	学士(理学) 学士(工学)	1.07	平成22年度			
	物理学科	4	-	-	-	学士(理学)	-	昭和39年度			
	化学科	4	-	-	-	学士(理学)	-	昭和39年度			
	機械システム工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成17年度			
	電気電子システム工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成17年度			
	建築学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成17年度			
	環境システム工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成17年度			
	機械工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	昭和39年度			
	電気工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	昭和39年度			
	人文学部							1.10		平成22年4月より入 学定員変更 (国際コミュニケーション 学 科 140 100 人間社会学科 140 80)	
	国際コミュニケーション学科	4	100	-	480	学士(国際コミュ ニケーション学)	1.08	平成17年度			
	人間社会学科	4	80	-	440	学士(社会学)	1.10	昭和40年度			
	心理学科	4	110	-	220	学士(心理学)	1.15	平成22年度			
	日本文化学科	4	100	-	200	学士(文学)	1.14	平成22年度			
	福祉実践学科	4	60	-	120	学士(社会福祉学)	0.88	平成22年度			
	英語英文学科	4	-	-	-	学士(英語英文学)	-	昭和40年度			
	心理・教育学科	4	-	-	-	学士(心理学) 学士(教育学)	-	昭和40年度			
	経済学部							1.16			平成17年4月より 学生募集停止 (英語英文学科)
	経済学科	4	280	-	1120	学士(経済学)	1.13	平成13年度			
	経営学科	4	160	-	640	学士(経営学)	1.22	平成17年度			
	情報学部							1.05		平成17年4月より 学生募集停止 (電子情報学科)	
	情報学科	4	170	-	680	学士(情報)	1.05	平成17年度			
	電子情報学科	4	-	-	-	学士(電子情報)	-	平成4年度			
	日本文化学部							-		平成22年4月より 学生募集停止 (日本文化学部言語 文化学科)	
	言語文化学科	4	-	-	-	学士(文学)	-	平成4年度			
造形芸術学部							0.64		東京都青梅市長淵 2丁目590		
造形芸術学科	4	150	-	600	学士(芸術)	0.64	平成17年度				
教育学部							1.24		東京都日野市 程久保2丁目1番地1号	平成22年4月より 学生募集停止 (人文学部心理・教 育学科(通信課程))	
教育学科	4	320	-	640	学士(教育学)	1.24	平成22年度				
(通信教育部) 教育学部							0.03				
教育学科(通信課程)	4	2,000	-	4,000	学士(教育学)	0.03	平成22年度				
人文学部							-				
心理・教育学科 (通信課程)	4	-	-	-	学士(教育学)	-	昭和42年度				

既設大学等の状況	(大学院)								
	理工学研究科 (博士前期課程)					0.51		東京都日野市 程久保2丁目1番地1号	
	物理学専攻	2	10	-	20	修士(理学)	0.15	昭和54年度	
	化学専攻	2	10	-	20	修士(理学)	0.90	昭和48年度	
	機械工学専攻	2	10	-	20	修士(工学)	0.25	昭和55年度	
	電気工学専攻	2	10	-	20	修士(工学)	0.55	昭和54年度	
	建築・建設工学専攻	2	5	-	10	修士(工学)	0.60	平成20年度	
	環境工学専攻	2	5	-	10	修士(工学)	0.80	平成20年度	
	(博士後期課程)						0.06		
	物理学専攻	3	5	-	15	博士(理学)	0.00	昭和56年度	
	化学専攻	3	5	-	15	博士(理学)	0.26	昭和51年度	
	機械工学専攻	3	5	-	15	博士(工学)	0.06	昭和57年度	
	電気工学専攻	3	5	-	15	博士(工学)	0.00	昭和56年度	
	建築・建設工学専攻	3	3	-	6	博士(工学)	0.00	平成20年度	
	環境工学専攻	3	2	-	4	博士(工学)	0.00	平成20年度	
	人文学研究科 (博士前期課程)						0.55		
	英米文学専攻	2	10	-	20	修士(英米文学)	0.15	昭和58年度	
	社会学専攻	2	10	-	20	修士(社会学)	0.00	昭和46年度	
	心理学専攻	2	10	-	20	修士(心理学)	1.45	昭和49年度	
	教育学専攻	2	10	-	20	修士(教育学)	0.25	昭和47年度	
	教育学専攻(通信課程)	2	30	-	60	修士(教育学)	0.66	平成11年度	
	(博士後期課程)						0.48		
	英米文学専攻	3	3	-	9	博士(英米文学)	0.00	昭和63年度	
	社会学専攻	3	3	-	9	博士(社会学)	0.00	昭和51年度	
	心理学専攻	3	3	-	9	博士(心理学)	0.55	昭和53年度	
	教育学専攻	3	3	-	9	博士(教育学)	0.44	昭和49年度	
	教育学専攻(通信課程)	3	3	-	9	博士(教育学)	1.44	平成18年度	
	経済学研究科 (修士課程)						0.60		
	応用経済学専攻	2	10	-	20	修士(応用経済学)	0.60	平成18年度	
情報学研究科 (博士前期課程)						0.35			
情報学専攻	2	7	-	14	修士(情報学)	0.35	平成10年度		
(博士後期課程)						0.00			
情報学専攻	3	3	-	9	博士(情報学)	0.00	平成12年度		

大学等の状況	大学の名称		いわき明星大学						所在地		
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度			
既設大学等の状況	(学部)	年	人	年次人	人					福島県いわき市中央台飯野5丁目5番地1	
	科学技術学部						0.92				
	科学技術学科	4	130	-	260	学士(工学)	0.92	平成22年度			
	電子情報学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成17年度	平成22年4月より 学生募集停止		
	システムデザイン工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成17年度	(電子情報学科・システムデザイン工学科・生命環境学科)		
	生命環境学科	4	-	-	-	学士(理工学)	-	平成17年度			
	理工学部										
	環境理学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成13年度	平成17年4月より 学生募集停止		
	電子情報学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	昭和62年度	(環境理学科・電子情報学科・機械工学科)		
	機械工学科	4	-	-	-	学士(理工学)	-	昭和62年度			
	人文学部						0.92				
	表現文化学科	4	90	-	360	学士(文学)	0.81	平成17年度	平成19年4月より 入学定員変更		
	現代社会学科	4	95	-	380	学士(社会学)	0.78	昭和62年度	(表現文化学科100 90)		
	心理学科	4	90	-	360	学士(心理学)	1.18	平成13年度			
	言語文化学科	4	-	-	-	学士(文学)	-	平成13年度	平成17年4月より 学生募集停止 (言語文化学科)		
	薬学部						0.55				
	薬学科	6	90	-	690	学士(薬学)	0.55	平成19年度	平成22年4月より 入学定員変更 (薬学科150 90)		
	(大学院)										
	理工学研究科										
	(修士課程)						0.44				
物質理学専攻	2	7	-	22	修士(物質理学)	0.45	平成4年度	平成22年4月より 入学定員変更	(物質理学専攻20 7、物理工学専攻20 7)		
物理工学専攻	2	7	-	27	修士(物理工学)	0.43	平成4年度				
(博士課程)						0.00					
物質理工学専攻	3	2	-	12	博士(理工学)	0.00	平成6年度	平成22年4月より 入学定員変更 (物質理工学専攻5 2)			
人文学研究科											
(修士課程)						0.32					
日本文学専攻	2	5	-	10	修士(日本文学)	0.30	平成4年度				
英米文学専攻	2	5	-	10	修士(英米文学)	0.00	平成7年度				
社会学専攻	2	5	-	10	修士(社会学)	0.00	平成4年度				
臨床心理学専攻	2	10	-	20	修士(臨床心理学)	0.65	平成17年度				
(博士課程)						0.33					
日本文学専攻	3	2	-	6	博士(日本文学)	0.33	平成6年度				
附属施設の概要	該当なし										

科目区分	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
全学共通科目	情報社会文化論 1	1・2・3・4前		2											兼2
	情報社会文化論 2	1・2・3・4後		2											兼2
	生涯学習論 1	1・2・3・4前		2											兼1
	生涯学習論 2	1・2・3・4後		2											兼1
	図書館の基礎と展望	1・2・3・4前		2											兼1
	社会に生きる私たちの人権	1・2・3・4前		2											兼1
	女性の生き方	1・2・3・4後		2											兼1
	地図を読む	1・2・3・4前		2											兼1
	ボランティア論	1・2・3・4前・後		2											兼1
	情報法制論	2・3・4前		2											兼1
	地球惑星学 1	1・2・3・4前		2											兼1
	地球惑星学 2	1・2・3・4後		2											兼1
	科学技術論 1	1・2・3・4前		2											兼2
	科学技術論 2	1・2・3・4後		2											兼2
	統計学 1	1・2・3・4前		2											兼2
	統計学 2	1・2・3・4後		2											兼2
	基礎数学 1	1・2・3・4前		2											兼3
	基礎数学 2	1・2・3・4後		2											兼3
	生物学 1	1・2・3・4前		2											兼2
	生物学 2	1・2・3・4後		2											兼2
	物理学 1	1・2・3・4前		2											兼2
	物理学 2	1・2・3・4後		2											兼2
	化学 1	1・2・3・4前		2											兼1
	化学 2	1・2・3・4後		2											兼1
	自然科学入門 1	1・2・3・4前		2											兼1
	自然科学入門 2	1・2・3・4後		2											兼1
	生物学 3	2・3・4前		2											兼1
	生物学 4	2・3・4後		2											兼1
	人類と環境	2・3・4前		2											兼2
	特別講義 1	1・2・3・4前		2											兼2
	特別講義 2	1・2・3・4前		1											兼1
	特別講義 3	1・2・3・4後		2											兼1
	特別講義 4	1・2・3・4後		1											兼1
小計 (181科目)		-	9	279	0		-		0	3	0	0	0	兼94	-

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学科共通科目	自立と体験2	1前	2							3					兼1	
	経営学概論	1前	4						1	1					兼1	
	簿記論	1前	2						2							
	経営戦略論1	1後	4						1	1						
	マーケティング論1	1後	4						2							
	会計学概論	1後	2						2							
	経営基礎1	1前	2						4	7						
	経営基礎2	1後	2						4	7						
	経営基礎3	2前	2						4	7						
	経営基礎4	2後	2						4	7						
	ゼミナール1	3前	1						6	6						
	ゼミナール2	3後	1						6	6						
	ゼミナール3	4前	1						6	6						
	ゼミナール4	4後	1						6	6						
	卒業研究	4通	8						6	6						
	経済学概論	1後		2											兼1	
	ビジネス法	2前		2											兼1	
	経営学方法論1	2前		2					1	2						
	経営学方法論2	2後		2					1	2						
	起業実務1	2後		2					1	3					兼1	
	起業実務2	3後		2					1	1					兼1	
	経営学特講A(ブランディング)	2後		2					1							
	経営学特講B(地域経済)	3前		2											兼1	
	経営学特講C(地域企業)	3後		2					4							
	経営学特講D(地域産業)	3後		2					3	1						
	小計(25科目)	-	-	38	20	0	-	-	9	7	0	0	0	0	兼4	-
	学科科目	経営組織論	2前		2						1					兼1
人的資源管理論		2前		2						1					兼1	
経営戦略論2		2前		2						1					兼1	
経営史		2後		2						1						
ビジネスゲーム		2後		2					1							
国際経営論		3前		2											兼1	
リーダーシップ開発		3前		2					1	1						
起業マネジメント論		3前		2						1					兼2	
ビジネスプランニング		3後		2						1					兼2	
アントレプレナーシップ論		3前		2					1	1						
企業の統治と社会的責任		3後		2					1							
中小企業経営論		3前		2						1						
小計(12科目)	-	-	0	24	0	-	-	2	3	0	0	0	0	兼5	-	
学科専門分野科目	流通論1	2前		4					1	1						
	流通論2	2後		2					1							
	マーケティング論2	2前		2					1							
	観光学概論	2前		2					1							
	観光ビジネス論A	2後		2					1							
	観光ビジネス論B	2後		2					1							
	観光マーケティング論	2前		2					1							
	サービスマネジメント論1	2後		4					2							
	サービスマネジメント論2	3前		2					1							
	消費者行動論	3前		2						1						
	マーケティングリサーチ	3後		2						1						
	eコマースとマーケティング	3前		2					1							
	広告論	3後		2					1							
	生産管理論	3前		2					1							
	サプライチェーンマネジメント	3後		2						1						
小計(15科目)	-	-	0	34	0	-	-	5	2	0	0	0	0	兼0	-	

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科 専門分野 科目 科目	簿記特講 1	1後		2					1						兼2 兼1 兼1
	簿記特講 2 A	2前		2											
	簿記特講 2 B	2後		2											
	小売マネジメント特講 1	2前		2						2					
	小売マネジメント特講 2	2後		2						2					
	ビジネススキル特講 A	2前		2					1						
	ビジネススキル特講 B	2後		2					1						
	財務会計論	2前		4					2						
	管理会計論	2後		4					1						
	原価計算論	2後		2					1						
	ビジネスアカウンティング	3前		2						1					
	経営分析論	3前		4					1	1					
	コンピュータ会計	3後		2					1						
	事業継承と会計	3後		2						1					
小計(14科目)	-		0	34	0		-		3	3	0	0	0	兼2	-
キャリア 開発 科目	キャリア開発 1	2前		2					2	1					
	キャリア開発 2	2後		2					2	1					
	キャリア開発 3	3後		2					2	1					
	キャリア開発 4	4前		2						1					
	インターンシップ	3前		2					2	1					
小計(5科目)	-		0	10	0		-		2	1	0	0	0	兼0	-
合計(252科目)		-	47	401	0		-		9	7	0	0	0	兼103	-
学位又は称号	学士(経営学)		学位又は学科の分野			経済学関係									
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
全学共通科目から32単位以上、学科科目から必修科目38単位を含む92単位以上、合計124単位以上修得すること。 〔履修科目の登録の上限：45単位(年間)〕							1学年の学期区分			2学期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

授 業 科 目 の 概 要			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	自立と体験 1	本学の教育目標を達成する最初の科目であり、自己実現の第一歩として設ける。初年時教育の一環として、新入生全員を対象に行う。30人程度のクラスを4～5班に分け、グループワークを通じて他者とのコミュニケーションスキルを向上させるとともに、最終的には「自分史」を執筆することにより自らの目標を明確化させて大学生としての自覚・自立を促していくことを目的とする。	
	哲学 1	哲学は、時代・地域に限定されない根源的な考察を展開する思考の営みである。そのために哲学は、人間の知的・文化的活動にかかわる広範囲な分野に繋がっている。本講義では、文学や芸術、宗教などを素材としながら、哲学という思考の大筋を理解できるようにしたい。「哲学とは何か」という基本的な問題から始めて、哲学において用いられる術語や概念などに馴れ親しむことができるように、原典の解説などを含めて、哲学の基本的な考え方を紹介する。	
	哲学 2	「他者」とは何か。他人が気にならない人はいない。我々が日常味わうストレスは、詰まるところ他人との関係に起因している。また、時に我々は、誰も見ていないのに誰かに見られているという思いにとりつかれる。このどこからやってくるのか分からない「視線」は、高ずれば人の神経・精神を侵すに至る。「他人・他者」とは、我々の生き方に根底において関わってくる何ものかである。この問題について、主にフロイトとラカンの精神分析的な立場から幾人かの哲学者・文学者の観点について検討する。	
	倫理学 1	行為の善悪に深くかかわる倫理学の問題は、同時に人間の生への問いでもある。有限な人間が、自分自身を凌駕し拘束する規範や原理へと応じるといふ課題がそこには含まれるからである。「自分とは何か」といった根本的な問いかけから始まり、他者との関係、世界との関係へと展開する人間の生の活動全般が、ここでの考察対象である。ヨーロッパの倫理学を中心としながら、人間の基本的条件やその存在のあり方を深く考えることを目的とする。	
	倫理学 2	私たちは「生活」上の、より多く幸福、より少なく不幸などといった比較級に現を抜かしている。その生ぬるい比較級に意識を奪われている。私たちは「人生」の幸福を忘れて生きている。最上級(それは比較級の極まったものに過ぎない)というより、むしろ原級の幸福を忘れている。「人間よ、何故幸福を求めて先を急ぐ。彼は知らないのである。立ち止まれば、その場で幸福であるのに。」このことは、社会学や心理学の対象比較研究では暗点となっている。ひとり反省の学・倫理学のみがこれを考える。	
	論理学 1	本講義は、思考の基礎をなす論理を対象とする。私たちが何かあることについて考えている場合、そこでは何らかの「推論」が行われている。そして、推論には正しい推論と正しくない推論がある。この授業では、正しい推論とはどのようなものか、そして正しい推論を行うためには何が必要なのかを理解し、正しい推論と誤った推論を区別する能力を身につけることを目標とする。論理的な思考について理解を深め、正確な文章読解の力を養うことが狙いとなる。論証のタイプの相違なども理解したうえで、論理的思考力の広がりや深まりを期したい。	
	論理学 2	本講義では、論理学の基礎を、記号や推論方式の区別などを素材に、一貫して理解することを目的とする。そのために、通常の文章を記号によって表現する能力を習得し、真理表を作成するなど、論理学の基本的手順を解説する。論理学に関するこうした形式的な手順を習得することによって、正しい推論と正しくない推論を明確に区別し、論理的に一貫した思考の習慣を身につけることを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	宗教学 1	宗教学とは何か、そもそも宗教学はどのような出自を持ち、どのように展開してきた学問なのか。本講では、宗教学の成り立ち、その構造を確認するとともに、宗教現象を、信じる者、信じる対象、その両者を結ぶ媒介としての象徴・儀礼から構成されるものと考え、それぞれに即して、宗教学の立場からその見方を提示する。	
	宗教学 2	宗教とは何か、という問題を、宗教哲学的に（例えば、宗教と悪の問題）、宗教社会学的に（例えば、宗教と現代社会・世俗化概念の意味とその帰趨）など、さまざまな角度から検討し、人間と宗教の関わり、人間にとって宗教の意味とその役割などについて理解を深める。	
	美学 1	美や芸術に関する重要な概念、主題、思想を取り上げ、具体例を交えながら解説する。「作品」や「表現」など、日常的に用いられる言葉が、美学・芸術学のなかではどのように理解され、またその理解にどのような変遷と広がりがあるかを解説する。そのために、伝統的な美や芸術のみならず、革新の著しい現代の美や芸術に関わる諸問題も取り上げたい。そして、古今東西の美や芸術の諸現象について全般的な理解を深めていくことで、私たちが生きる現代の感性とは何かを探ることを目標とする。	
	美学 2	一方に真善美正利快の序列の中に確とした位置を占める古典美がある。美と快についての「感」がつく。即ち、美感、快感。（正義感とは正義漢の誤用）ニヒリズムの中でニーチェは、最下位の「快」こそ生命の高揚であるという。とすれば「美」の位置はどうなるのか。古典美においては知性×感性の図式内で考えられてきた。位置の揺らいだ「美」は元の位置に戻されねばならぬ。それが、遡って十七世紀、知性の学に倣う感性の学aesthetics即ち美学の誕生であった。こうした学は可能か。むしろ日本的な「感」にこそ、その可能性があるのではないか、これを探る講義である。	
	心理学 1	心理学の基本的な考えを理解した上で、実証的な心理学に対する興味や関心を高めることが、本講義の目的である。講義では、知覚心理学、思考心理学、感情心理学、社会行動心理学等を通して、人がなぜ誤ったり騙されたりするかについて、「誤り」、「エラーとバイアス」、「騙し」をキー概念にして、人の情報処理過程について心理学の様々な領域について解説していく。日常生活で経験する「誤り」について知ることで、人の情報処理過程についての理解を深め、日常生活で間違えたり騙されたりしないためにいかにすべきかについて自分で考えられる力を付ける。	
	心理学 2	心理学は、自分ではその存在を確信できるのに、いざ客観的に考えようとする、捉えどころがないように感じられる心の問題を科学的に解明するものである。心理学にはどのような分野があり、それらの分野で心の問題がどのように扱われているかについて、実験心理学を中心に知覚、学習、認識、発達の順序で講義を行う。一般的には、心理学は実際には広範な研究分野があり、それらの具体的な考え方とそこから明らかにされた心の様々な側面を理解することで、心についての考えを深める。	
	教育学 1	当科目の教育目標は、歴史的展開を理解すること、法規的・制度的に理解すること、行政的に理解すること、教育思想史的に理解すること、社会問題的に理解すること、以上の5点にあるが、授業では、教育の目的、子供の成長と教育、主にルソーの近代教育思想、デューイ等の現代教育思想、近代学校教育制度の発展の歴史等の順序で講義を行う。なお、現代は教育問題が山積し、教育の制度改革が急激なので、時事的な教育問題について関心を持ち、日頃から自分の考えを形成することを達成目標とする。	
	教育学 2	当科目の教育目標は、歴史的展開を理解すること、法規的・制度的に理解すること、行政的に理解すること、教育思想史的に理解すること、社会問題的に理解すること、以上の5点にあるが、授業では、各国の学校教育制度と教育改革、日本の学校教育制度との比較、現代教育の課題と改革、教育行政の諸問題等の順序で講義を進める。なお、現代は教育問題が山積しているが、現代の教育問題を憲法、教育基本法、学校教育法その他の教育法規的視点および教育の歴史的観点から考えることを達成目標とする。	
倫理学 3	現在、生命倫理や環境倫理などさまざまな場面で倫理的思考が要求されるようになった。このような状況を受けて、倫理の基本について学ぶことを目的とする。安楽死やインフォームド・コンセント、現代の環境破壊など、具体的で切迫した問題を手がかりとして、現代における倫理学の展開を考える。加えて、文学や歴史など教養の根底にある倫理的思考を考察する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	倫理学 4	人間の生のあり方を問う倫理学は、原理的な考察を要求すると同時に、その時代に応じた具体的問題との取り組みが迫られる領域でもある。そのために、人間が実際に生きている社会や歴史をどのように考えるかという問いは、倫理学の重要な問題となる。現代の倫理学にとっては、戦争と平和の問題、グローバル化への応答などが不可欠である。本講義では、基本的な社会論・歴史論を概観したうえで、現代固有の問題を考察する。	
	美学 3	現代の美術・芸術は、既成の価値観や美意識を覆し、新たな美的感性に訴えかけるものとなっている。きわめて難解な前衛芸術から始まり、新たな技術的手段を支えられたコンピュータ・アートやグラフィック、または伝統的には美の対象にならなかった主題までが、現代では美学の対象となっている。ファッションやサブカルチャーなど、現代の多彩な展開を見据えながら、美学の新たな方向と可能性を探っていく。	
	美学 4	有史以前から人間は洞窟壁画や舞踏をはじめ、表現活動を文化の一部として繰り返してきた。本講義では、狭義の芸術に限らず、人間の表現活動全般を多角的に考察することにする。建築・音楽・舞踏・舞台芸術・文学・絵画など、人間の表現活動はきわめて多彩であり、そこには宗教や思想、政治などが複雑に絡み合っている。そうした多様で複雑な文化的営為を「表現」というキーワードで広く考えることを目的とする。	
	哲学 3	哲学の歴史とは、それぞれの歴史的時代の具体的な状況の中で、人間が哲学的思索を行った足跡を如実に示すものである。そこからは、それぞれの時代や状況が提起を知ることができる。本講義では、そうした哲学の歴史的展開を、主にヨーロッパ哲学を中心に概観する。古代・中世・近代へと時代が進むに従って、どのような問題意識が現れ、それが現代にとってどのような意味をもつのかを考察していく。	
	哲学 4	フロイト『精神分析入門』の第1部「錯誤行為」と第2部「夢」を中心に扱う。フロイトの言う無意識というものが人間の生活においてどのような意義をもっているか、具体的にフロイトの文章を辿りながら検討する。神経症に対する臨床的な医療行為から始まった精神分析が、人間についての深い洞察を支えられた一つの倫理思想であることが理解されるだろう。	
	思想への招待	哲学・倫理学・宗教学・美学など、人文系思想科目について、広く全般的な案内となることを目標として、それぞれの分野での中心的思想家・著作を紹介していく。抽象的で難解と思われがちな思想・哲学を、なるべく多くの学生が親しみをもてるようなかたちで展開し、初年次用の導入科目とする。	
	健康・スポーツ科学論	現代社会を生きる人々にとって、心と体の健康を維持することは豊かな生活基盤を築く上で大切な課題である。その為には、自らの心や体に対する知識や理解、健康的ライフスタイルの創造(思考・判断力)など「生きる力」を高めるための総合的な学力の獲得が必要である。授業では、運動生理学や健康科学、栄養学、スポーツ科学などの知見を活かしながら講義を展開し、健康を実践的に維持・向上させるための学力の獲得をめざす。	
	健康・スポーツ演習 1	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目選択し、各スポーツ種目の実践を通して、思考力・判断力・コミュニケーション能力を向上させていくことをねらいとする。そのために、学生一人一人が自己の興味や能力に応じた課題を持ち、目的によっては、グループで協力して、スポーツの実践や調査、測定・分析などを行ない、最後に成果についてレポートなどによって報告する。本演習を通じて、健康で活動的な生活を送るための、運動やスポーツ実践の意義や重要性について理解することを目的とする。	
健康・スポーツ演習 2	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目選択し、各スポーツ種目の実践を通して、思考力・判断力・プレゼンテーション能力を向上させていくことをねらいとする。そのために、学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んだ課題をさらに発展、あるいは、新しい課題に挑戦するなどして、スポーツの実践や調査、測定・分析などを行ない、最後に成果についてレポートを提出する。本演習を通じて、生涯にわたって主体的に運動やスポーツに取り組むことのできる姿勢を育てることを目的とする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	健康・スポーツ演習 3	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目を選択し、各種スポーツの実践を通して知識・思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力などを向上させることをねらいとする。そのために、学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んできた課題をさらに発展させ、選択したスポーツ種目と関連した調査、測定・分析などを行ない、その結果について、自己の考えや仲間の考えをまとめるなどしてレポート提出する。本演習を通じて、身体能力の育成に努めるとともに、生涯にわたって自らが主体的、意欲的に仲間とともに運動やスポーツに関わることが出来る姿勢を育てることを目的とする。	
	健康・スポーツ演習 4	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目を選択し、各種スポーツの実践を通して思考力・判断力・表現力・リーダーシップ能力などを向上させることをねらいとする。そのために、学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んできた課題をさらに発展させ、体験的事実を正確に理解したり、情報を分析・評価し、論述したりする。さらには、課題について、構想を立て実践し、評価・改善することができるようにする。本演習を通じて、学生自らが身体能力の育成に努めるとともに、4年間の演習授業の経験を生かし、卒業後も地域や職場の仲間とともに計画的・継続的な運動環境の調整に関わることができる力を培うことを目的とする。	
	外国語（英語）1 A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語1 Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、特に「読む・書く」技能を伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上の個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現していく。	
	外国語（英語）1 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語1 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、特に「聞く・話す」技能を伸張させる。授業中も「積極的にコミュニケーションをしようとする態度」が求められ、授業外でも意欲的に学習を展開していく自律性が求められる。	
	外国語（英語）2 A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語2 Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、英語1 Aをさらに発展させ、特に「読む・書く」技能を伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上の個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現していく。	
	外国語（英語）2 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語2 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、英語1 Bをさらに発展させ、特に「聞く・話す」技能を伸張させる。授業中も積極的にコミュニケーションをしていける技能が求められ、授業外でも意欲的に学習を進展させていく自律性が求められる。	
	外国語（ドイツ語）1 A	1 Aは初級者を対象にしてドイツ語文法の説明と理解を中心におく授業である。テキストもそれに見合ったものが用意される。文法中心とはいえ平易なドイツ語文・会話などを発音、聞き取り、音読などをしながらドイツ文に親しんでゆく。音声・映像メディアなども駆使しつつ、ドイツ語を通して異文化理解を深める。本科目履修後はドイツ語2 Aを履修することが望ましい。	
	外国語（ドイツ語）1 B	1 Bは初級者を対象にして1 Aよりもドイツ語の文章に多く接することをねらいとしている。とはいえ、初心者が対象であるから文法項目も段階を追って進行する。語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文などの練習をつづけて理解を深める。本科目履修後は、ドイツ語2 Bを履修することが望ましい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（ドイツ語）2 A	2 Aは初級者を対象にしてドイツ語文法の説明と理解を中心におく授業である。テキストもそれに見合ったものが用意される。文法中心とはいえ平易なドイツ語文・会話などを発音、聞き取り、音読などをしながらドイツ文に親しんでゆく。音声・映像メディアなども駆使しつつ、ドイツ語を通して異文化理解を深める。ドイツ語1 Aの内容を受けて展開するため、同科目を履修済みであることが望ましい。	
	外国語（ドイツ語）2 B	2 Bは初級者を対象にして2 Aよりもドイツ語の文章に多く接することをねらいとしている。とはいえ、初心者が対象であるから文法項目も段階を追って進行する。1 Bで補い得ないもの、語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文、講読などの練習をつづけて理解を深める。ドイツ語1 Bの内容を受けて展開するため、同科目を履修済みであることが望ましい。	
	外国語（フランス語）1 A	フランス語の基礎の学習です。視聴覚教材を取り入れて、まず眼と耳でフランスとフランス語に接し、この1 Aでは初級文法の前半を学びます。2 Aと併せて、最終的にフランスとフランス語に親しみ、話し、読み、書くことの初歩をマスターすることが目標です。	
	外国語（フランス語）1 B	語学+フランス文化。コンピュータ教材を用いた初級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが目標です。	
	外国語（フランス語）2 A	「フランス語1 A」の学習を基礎にした初級文法の学習が中心になります。この2 では、その後半を学びます。1 A同様に視聴覚教材を用いて、目と耳からフランス語を取り入れます。	
	外国語（フランス語）2 B	語学+フランス文化。1 Bの続きです。コンピュータ教材を用いた初級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが目標です。	
	外国語（中国語）1 A	中国語学習の準備完了を目指す中国語入門クラスである。最も大切な中国語の四声・ピンインの基礎的な練習から行う。また同時に中国語入門の段階における中国語文法の初歩を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、正確な発音と基礎的な文法・語彙を習得し、平易な中国語を聞き、話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級レベルに到達できる簡単な日常挨拶語を約50～80を習得する。	
	外国語（中国語）1 B	中国語1 Bにおいても中国語の四声・ピンインの基礎的な練習から行うが、主として、基本的にはネイティブが担当するので、簡単な会話の練習に重点を置く。そして、やはり、当該授業を学習を学び終えた時には、正確な発音と基礎的な文法・語彙を習得し、平易な中国語を聞き、話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）2 A	中国語1 Aで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語入門から初級に至る段階における、中国語の語彙、文法を学び中国語の基礎をマスターし、簡単な中国語を聞き、話すことができるようになることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級から4級レベルに到達できることを目標とする。	
外国語（中国語）2 B	中国語2 Bにおいても中国語1 Bで学んだ中国語の基礎を復習をおこなうが、主としてネイティブが担当するので、中国語入門から初級の段階における中国語会話を学び終えた時には、比較的日常的な中国語会話を話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級から4級レベルに到達できるようにする。常用語500～1000による中国語単文の日本語訳と日本語の中国語訳ができるようにする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（韓国語）1 A	韓国語は初習外国語の中でも文字（ハングル）とその発音を最初に学習する必要があるため、韓国語を母国語とする教師がおこなう外国語（韓国語1 B）との連携は必須である。連携することによって効果的な学習が出来る。最初に母音、次に子音、そして合成母音、最後に子音で終わるパッチムを学習する。ハングルと発音とを結びつけることが目標となる。一応ハングルが読めるようになってから指定詞による肯定文と否定文の学習をおこなう。簡単だが基本的な文型となるのでしっかりと身につける。	
	外国語（韓国語）1 B	韓国語を母国語とする教員によっておこなわれ、日本語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）1 Aと連携しつつ学習される。ハングルと発音の学習においてはネイティブの教師によって発音に注意される。最初に母音、次に子音、そして合成母音、最後に子音で終わるパッチムを学習する。ハングルと発音とを結びつけることが目標となる。一応ハングルが読めるようになってから指定詞による肯定文と否定文の学習をおこなう。簡単だが基本的な文型となるのでしっかりと身につける。	
	外国語（韓国語）2 A	1 A, 1 Bで学習したことを踏まえて基本的な文法事項の学習をおこなう。動詞、形容詞、存在詞による肯定文と否定文。尊敬の表現、過去形などについて学ぶ。また同時に語彙数を増やすことを目標とする。この授業は日本語を母国語とする教員によっておこなわれ、韓国語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）2 Bと連携しつつおこなわれる。助詞、数詞などの使い方についてもしっかりと学びたい。また文章や単語に現れる韓国の文化の特徴についても注意していきたい。	
	外国語（韓国語）2 B	日本語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）2 Aと連携しつつおこなわれる。ネイティブによる授業であるので、特に発音に注意したい。また学習する内容に合わせた簡単な会話の練習なども取り入れた学習を行う。基本的な文法事項として、動詞、形容詞、存在詞の肯定文と否定文。尊敬の表現、過去形などについて学ぶ。	
	日本語1 A	「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力 講義を理解し、ノートを取り、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力 を定着させることを目標とする。講義を聴く技法、ノートをとる技法・情報の整理法、レポートを書く技法、発表する技法、資料・文献の収集法、レポートを書く技法を中心テーマとして取り上げて、テーマに沿った課題を出し、提出した課題を分析しながら授業を進める。	
	日本語1 B	新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲などさまざまなメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。語彙力、読解力を高め、新聞記事や短編小説の大意をつかみ、要約文や粗筋をまとめることができるレベルを目標とする。授業ではさまざまなジャンルの文章を多読・精読し、要約をまとめてもらう。また、映画やアニメーションを鑑賞しながら、その表現の特質を考えていく。	
	日本語2 A	「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力 講義を理解し、ノートを取り、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力 を定着させることを目標とする。日本語1 Aで習得した技法を確認・復習しながら、授業で調査・研究結果の発表方法、論文を読む技法を検討する。さらに、実際に課題を決め、関連する課題図書を読んで、研究成果を発表するという形で授業を進める。	
	日本語2 B	新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲などさまざまなメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。書く能力、発表能力の強化を図り、自分の意見や感想を的確に発表・記述できることを目標とする。授業では日本社会の幾つかのトピックスを取り上げ、関連する資料を読解しながら、質疑応答や討論を行った上で、各トピックスに対する感想文を提出し、それに対してフィードバックを行うという形で授業を進める。	
	情報リテラシー a	この授業では、情報を適切に収集し、加工し、自ら情報を表現（発信）するまでの基礎的な技能や知識を学習し、さらに情報を活用する上での情報倫理（モラル）や、情報機器及び情報通信ネットワークの機能など基本的知識や能力の習得を目標としている。 情報リテラシー a では、情報倫理と基本的なアプリケーションの基礎を中心に習得する。 Win基礎・情報倫理・情報検索・画像処理（Photoshop）・ホームページ作成（HTML）・Word基礎と応用	講義 6時間 演習 24時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	情報リテラシーb	この授業では、情報を適切に収集し、加工し、自ら情報を表現（発信）するまでの基礎的な技能や知識を学習し、さらに情報を活用する上での情報倫理（モラル）や、情報機器及び情報通信ネットワークの機能など基本的知識や能力の習得を目標としている。 情報リテラシーbでは、情報処理の基礎と基本的なアプリケーションの基礎と応用力を中心に習得する。 情報処理の基礎・Excel基礎と応用・データベース体験（Access）・プログラミング体験（Basic）・PowerPoint基礎と応用・総合的な課題	講義 3時間 演習 27時間
	言語学1	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学を初め、あらゆる学問分野を通して考える。とくに、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来、構造、とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。授業では、言語学とは何か、音声学(母音・子音)、音韻論、音節構造、形態論、言語の種類、語彙と文法、統語論、ジャンル分析等について講義を行う。	
	言語学2	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学を初め、あらゆる学問分野を通して考える。とくに、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来、構造、とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。授業では、語彙の意味論、意味と比喻、言語変種、言語の変化、言語獲得論、言語教育の前提、言語能力の評価、言語と人間性等について講義する。	
	言葉の思想	これは言語学の講義ではない。言語学は、言ってみれば、通時的或いは共時的に言葉を採集し標本化して、これを観察分類系統づけを行う。ここでは、言葉は死物である。言葉自身の抜け殻である。この講義は、「生」きた言葉を扱う。しかし社会的に「活」用されていればそれで生きた言葉ではない。むしろ言葉の発「生」の現場に立ち会おうとする講義である。と言ってもホモ・サピエンスの登場するはるか昔のことのことではない。今ここにたち現れる言葉について考える。	
	科学コミュニケーション論	科学コミュニケーションは、一般に「研究者、メディア、一般市民、科学技術理解増進活動担当者、行政当局間等の情報交換と意思の円滑な疎通を図り、共に科学リテラシーを高めていくための活動」ととらえられている。本講義は、大学生の科学リテラシー向上を図るための教養教育の一科目として新規に開講するものであるが、狭義の「科学コミュニケーション」にとらわれることなく、人間以外の生物間コミュニケーションにおける“ことば”、人間と植物・微生物のコミュニケーション産物としての“うつくしさと文化”も主要テーマとして論じる。	
	映画と音楽で学ぶ英語	本授業の目的は、英語への興味関心を喚起し、英語学習への意欲を高めることである。学習者の多くが最も興味を持つ文化的分野として、音楽、スポーツ、アート等があるが、映画の中にはこれらの多様な文化が混在している。本授業は、特に映画のシナリオ（英語の会話）と音楽（英語の歌詞）の理解を通して、英語による表現法と様々な英語圏の文化とを学ぶ。映画と音楽が持つ、「人の心に訴える力」を牽引力に、学習者が英語を学ぶ魅力を十分に実感し、これを機に、積極的に英語に取り組むようになることを期待する。	
	異文化体験	The purpose of this course is to prepare students for study trips abroad. It is expected that students taking this course will be studying abroad at one of Meisei's affiliated Universities at some time during the current academic year. The emphasis will be on developing coping strategies for living and functioning safely in a different culture where the language of communication is English. English will be the medium of instruction and such topics as Travel Information; Useful English for travel; Homestays; Comparative cultures and customs; Travel Documents; Insurance, health and safety will be covered. Students will be assessed on their participation, degree of understanding and preparation, and the successful completion of the study trip abroad. 本講義は学生の海外研修旅行の準備を目的とする。受講者は研修旅行出発前に、異文化社会でのさまざまな場面における英語での対応や対処の仕方を学ぶ。講義は英語で行い、海外渡航及び滞在に必要な事柄についての知識、情報を得る機会とする。受講態度と講義内容の習得、及び研修旅行への参加により評価される。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	異文化で学ぶ英語	「言葉は文化である」と言われる。言葉と文化は一体なのか。分離することはできるのか。教養外国語への導入として、この科目では異文化をテーマにこの問題を追究ながら、英語という言語文化に迫る。言語は文化理解なしには解読することはできない。講義では、先ず、英語文化圏の生活文化を中心に探訪をする。主要な民族言語として英語が話される地域の衣食住について学び、英語文化を理解する。次に、異文化としての英語を探究する。日本語と対照しながら身の回りの言語事実から言葉のおもしろみを発見し、外国語への誘いとする。	
	外国語（英語）3 A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語3 Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、日本人講師のもと、特に「読む・書く」技能をさらに伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上、個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現し、自分でさらに発展させていく。	
	外国語（英語）3 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語3 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、外国人講師のもと、特に「聞く・話す」技能をさらに伸張させる。授業中も積極的にコミュニケーションをしていける技能が求められ、授業外でも意欲的に学習を進展させていく自律性が求められる。	
	外国語（英語）4 A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語4 Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、日本人講師のもと、3 Aの内容をさらに発展させ、特に「読む・書く」技能をさらに伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上、個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現し、自分でさらに発展させていく。	
	外国語（英語）4 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語4 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、外国人講師のもと、3 Bの内容をさらに発展させ、特に「聞く・話す」技能をさらに伸張させる。授業中も「積極的にコミュニケーションをしようとする態度」が求められ、授業外でも意欲的に学習を進展させていく自律性が求められる。	
	外国語（ドイツ語）3 A	3 Aの履修者は既に1 A・2 Aを履修済みであることがのぞましく、さらにドイツ語中級へとステップアップを図る。文法事項の確認はドイツ語文章のなかで確認し、文章の組み立て方を理解する。簡単なドイツ語文を書けることもねらいとしたい。同4 Aもこうした文の構造・語順などを文法的にさらに理解を深めるようにしたい。	
	外国語（ドイツ語）3 B	3 Bの履修者は既に1 B・2 Bを履修済みであることがのぞましく、さらにドイツ語中級へとステップアップを図る。テキストは講読中心である。さまざまな読み物が教材となりうる。3 Aよりはおおくの読み物に接することをねらいとしたい。また視聴覚メディアを用いて内容を理解してゆくことも試みたい。同4 Bについてもその延長上にある。	
	外国語（ドイツ語）4 A	4 Aの履修者は既に3 Aを履修済みであることがのぞましく、引き続きさらにドイツ語中級へとステップアップを図る。文法事項の確認はドイツ語文章のなかで確認し、文章の組み立て方を理解する。簡単なドイツ語文を書けること、表現することもねらいとしたい。またこうした文の構造・語順などを文法的にさらに理解を深めるようにしたい。	
	外国語（ドイツ語）4 B	4 Bの履修者は既に3 Bを履修済みであることがのぞましく、引き続きさらにドイツ語中級へとステップアップを図る。テキストは講読中心であり、さまざまな読み物が教材となりうる。さらに「話せるドイツ語」もテーマとしたい。4 Aよりはおおくの読み物に接することをねらいとしたい。また視聴覚メディアを用いて内容を理解してゆくことも試みたい。	
外国語（フランス語）3 A	1年次に学んだ1・2の初級の学習を基礎にして中級レベル前半の文法学習に入ります。1・2と同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をします。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（フランス語）3 B	語学+フランス文化。1・2Bの続きです。コンピュータ教材を用いた中級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標です。	
	外国語（フランス語）4 A	これまでの学習を基礎にして中級レベル後半の文法学習に入ります。1・2・3Aと同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をします。	
	外国語（フランス語）4 B	語学+フランス文化。1・2・3Bの続きであり、その発展です。コンピュータ教材を用いた中級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標です。	
	外国語（中国語）3 A	中国語2 Aで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、自分で応用力を養いうる基礎的能力の保証をします。基本的な文章を読み、簡単な会話ができることを目標とする。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験4級から3級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）3 B	中国語2 Bで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、自分で応用力を養いうる基礎的能力の保証をします。基本的な文章を読み、簡単な会話ができることを目標とする。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験4級から3級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）4 A	中国語3 Aで学んだ中国語を復習しながら、初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、比較的長い文章読解ができ、簡単な中国語会話を話すことができる。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験4級から3級レベルに到達できるようにする。常用語は1000～2000による中国語複文の日本語訳と中国語訳ができる	
	外国語（中国語）4 B	中国語3 Bで学んだ中国語を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、比較的長い文章読解ができ、簡単な中国語会話を話すことができることを目標とする。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験3級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（韓国語）3 A	1 A、1 B、2 A、2 Bを履修していることを前提として授業を進める。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにその教科書の上級編を進める形をとるが、韓国語3 Aにおいては日本語話者教員を配置して文法事項の説明および練習問題等に比重を置く。既に基本的な文法事項は習得されているはずであるから、ここでは初級韓国語学習で最後に残された重要文法事項である連体形を中心に、練習を繰り返して定着を図る。もちろん、3 B担当教員との密接な連携のうえに行われるのは当然である。	
	外国語（韓国語）3 B	1 A、1 B、2 A、2 Bを履修していることを前提として授業を進める。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにその教科書の上級編を進める形をとるが、韓国語3 Bにおいては韓国語話者教員を配置してある程度の会話訓練も授業に取り入れる。学習が二年目に入っている学生が基本的な対象であるので、韓国語のみならず、韓国・朝鮮文化への関心を維持させる上でも会話能力を磨くことは有益である。もちろん、3 A担当教員との密接な連携のうえに行われるのは当然である。	
外国語（韓国語）4 A	基本的には日本語話者教員を配置して3 Aから継続して教科書を進めていくが、教科書を終わらせることを目的とはしない。一般に二年次用の韓国語教科書は後半に入るに従って日常会話で使われる表現を多く取り入れる傾向があるが、未だ基盤が未熟な段階で高度な会話形を教えていくことにはあまり意味がないので、韓国語の基礎段階として必須の文法事項習得を終えた段階で、その韓国語能力をもって読解可能な文章を辞書を使って読むことに重点を移していく。それが結局は、会話形も含めた韓国語能力全般の底上げにつながると思う。なお、基礎的な会話訓練は4 Bにおいて行うこととなる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（韓国語）4 B	韓国語話者教員を配置して、プリント等の教材を使用して主に会話訓練を行うが、4 Aの進捗状況を確認しつつ、使用可能な文法事項を増やしていく。その際、あまり高度な会話形を追求するのではなく、もっとも基本的な形を確実に身につけられるように指導する。往々にして、「生きた韓国語」のスローガンのもと、学生の処理能力を超えるような会話形を教えるケースがあるが、既修文法レベルがさして高度ではなく、またその定着も十分ではない状況においては逆効果である。	
	日本語3 A	この授業では既習の日本語表現を確認し、より論理的な文章を書く方法を提示する。文体によってことばの選び方や文末表現が違うので、教材や様々な文章例を参考にして何度も作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることをめざす。いろいろな書きことばの文体を学んだ後、物事の前関係、仕組み・手順・方法、因果関係、行為の理由・目的、物事間の共通点・相違点、伝聞・引用などを表す表現を取り上げ、作文の練習をするというスタイルで授業を進める。	
	日本語3 B	本講義は対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上をめざす。後半に話しことばと似た性格を持つ電子メールの練習をして、両者の共通点と相違点を認識してもらうことを目標とする。授業は、まず話し言葉の特徴を考え、その後日本語の改まり度や敬意表現、伝言、勧誘、許可、情報の提示、依頼、申し出などの機能を担う表現を取り上げ、ロールプレイやディベートといった形でそれらの表現を含む会話練習をする。さらに、会話と電子メールの共通点と相違点を検討し、電子メール表現の特質を考える。	
	日本語4 A	この授業ではより論理的な文章を書く方法を提示する。教材や様々な文章例を参考にして何度も作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることをめざす。また、自分の意見と、参考にした文章との違いを明確に書き分けられることを目標とする。自分の考えを述べ、物事の変化・推移、賛成意見・反対意見などを表す表現を取り上げ、作文の練習もする。さらに、テーマと目的やアウトラインを考え、情報を整理して、レポートにまとめるというスタイルで授業を進める。	
	日本語4 B	本講義は対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上をめざす。また、文章をもとに、プレゼンテーションをする力を身につけることも目標とする。授業ではまず、不満・言い訳、提案、感想表現といった対人関係を考えた基本的な会話表現を練習する。その後、電子メールと手紙の共通点と相違点を考える。後半ではインタビューとそのまとめ、発表の練習をし、さらに実際にインタビューによる調査とそのプレゼンテーションを行う。	
	上級英語1	英語1及び英語2で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。1では、それに必要な基本的な語彙、フレーズを学ぶ。	
	上級英語2	英語1及び英語2で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。2では1に続いて、表現や伝達に必要な基本的な語彙、フレーズの学習をさらに発展させる。	
	上級ドイツ語1	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、という人に開かれたドイツ語です。テキストも担当者がその意向をうかがいます。さらにまたドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひと、ドイツ語技能検定試験（独検）という5級～1級までのものとか、日本政府観光局（JNTO）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	
	上級ドイツ語2	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。テキストも担当者がその意向をうかがいます。さらにまたドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひと、ドイツ語技能検定試験（独検）という5級～1級までのものとか、日本政府観光局（JNTO）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級フランス語 1	フランス語のコミュニケーション能力の向上を目指した実践的練習を行う。これまで学んできたフランス語を実際に運用できるようになるために、基本的な言語表現を、その表現が用いられる状況に即した形で用いることができるようになることを目標にして、DVD、CD等、視聴覚教材を活用しつつ、話す、聞く、読む、書くという4つの作業をフランス語で行う。	
	上級フランス語 2	既習フランス語の運用能力を高めるとともに、フランス語世界についての知識を深めることを目標とする。フランス語世界の歴史、文化、社会問題等について、フランス語で書かれたテキスト（新聞・書物等）を利用し、また文学作品のテキストやその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVDを活用しつつ、フランス語世界の具体相に触れ、受講者をその世界へ触発する。	
	上級中国語 1	上級中国語 1 を学習することによって、中国語検定試験 4 級～3 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」を定着させ、簡単な通訳もできることを目標とします。さらには、上級中国語 2 へと発展できるように、中国語を「話す」から自分のメッセージを「語る」へとつなぐ基礎的段階を習得します。また、中国語スピーチコンテストに積極的に挑戦するような中国語コミュニケーション能力の向上を図ります。	
	上級中国語 2	上級中国語 1 から、段階的に学習することによって、中国語検定試験 3 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」を定着させ、簡単な通訳もできることを目標とします。さらには、上級中国語 2 へと発展できるように、中国語を「話す」から自分のメッセージを「語る」へとつなぐ基礎的段階を習得します。また、中国語スピーチコンテストに積極的に挑戦するような中国語コミュニケーション能力の向上を図ります。	
	上級韓国語 1	韓国語の基礎の学習を終えた段階で、語彙、文法、表現の増強を図り、実践的に表現しうる能力を養う。用言の活用の様々なタイプに習熟し、話しことばと書きことば、敬意体と非敬意体、連体形や接続形、引用形などの様々な文法を学ぶ。加えて、基礎的な語彙力の拡充をはかり、「電話の表現」、「感謝を表す」、「許可を得る」、「提案する」、「意志を述べる」といった、より洗練された談話表現の獲得にも力を注ぎ、実践的な表現力を増強する。	
	上級韓国語 2	韓国語の基礎の学習を終えた段階で、会話力と作文力を実践的な練習を通して身につける。まず、発音の練習を徹底して繰り返す。次に、会話における「場」の重要性を認識し、いつ、どこで、誰と、何を、どのように、なぜ、言葉を用いて話すのか常に意識し、やり取りする練習を行う。また、自分の考えや感想を韓国語の自然な表現で表し、まとめる力を養う。加えて、韓国語学習の成果の一つとしてハングル検定試験 3・4 級合格を目指し、試験対策も行う。	
	上級英語 3	英語 1 及び英語 2 で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4 技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。3 では、1、2 で学んだ表現方法を使って、様々なテーマのもとに、自己表現活動、伝達活動の実践をする。	
	上級英語 4	英語 1 及び英語 2 で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4 技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。4 では、3 に続いて、実践活動をさらに発展させる。	
	上級ドイツ語 3	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学してみたいという人にかかれたドイツ語です。上級ドイツ語 3 では同 1・2 の内容をさらに発展させて展開します。またドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひとと、「ドイツ語技能検定試験」（独検）という 5 級～1 級までのものとか、日本政府観光局（JNTO）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級ドイツ語 4	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。上級ドイツ語 4 では同 3 の内容を受けて講義を展開します。またドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひとと、「ドイツ語技能検定試験」(独検)という 5 級～1 級までのものとか、日本政府観光局(JNTO)がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	
	上級フランス語 3	「上級フランス語 1」に続いて、フランス語のコミュニケーション能力の向上を目指した実践的練習を行う。これまで学んできたフランス語を実際に運用できるようになるために、基本的な言語表現を、その表現が用いられる状況に即した形で用いることができるようになることを目標にして、DVD、CD等、視聴覚教材を活用しつつ、話す、聞く、読む、書くという4つの作業をフランス語で行う。	
	上級フランス語 4	「上級フランス語 2」に続いて、既習フランス語の運用能力を高めるとともに、フランス語世界についての知識を深めることを目標とする。フランス語世界の歴史、文化、社会問題等について、フランス語で書かれたテキスト(新聞・書物等)を利用し、また文学作品のテキストやその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVDを活用しつつ、フランス語世界の具体相に触れ、受講者をその世界へ触発する。	
	上級中国語 3	上級中国語 3 を学習することによって、中国語検定試験 3 級～2 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」ということから、さらに進んで、自分の伝えたいメッセージを「語る」ということへつないでいきます。さらには、中国語スピーチコンテストや中国語ビジネス資格試験へ積極的に挑戦できる中国語コミュニケーション能力の習得を目標とします。	
	上級中国語 4	上級中国語 3 から、段階的に上級中国語 4 を学習することによって、中国語検定試験 2 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」ということから、さらに進んで、自分の伝えたいメッセージを「語る」ということへつないでいきます。主として、中国の新聞や映画なども「見て、聞いて」自然に分かるようにします。さらには、中国語スピーチコンテストや中国語ビジネス資格試験へ積極的に挑戦できる中国語コミュニケーション能力の習得を目標とします。	
	上級韓国語 3	韓国語の中級を学んだ学生を対象とする。より豊かで自然な韓国語表現力を養うことを学習目標とする。日本語と韓国語の対照言語学的な観点も考慮にいれ、両言語の類似点と相違点に気付き、さらに直訳では不自然な、高度な表現の習得にも力を注ぐ。また、韓国で出版された小説、童話、詩集、新聞記事等を教材とし、豊かな表現の学習とともに、そこに反映されている韓国文化や価値観、考え方を知り、理解することを目指す。	
	上級韓国語 4	韓国語の中級を学んだ学生を対象とする。より豊かで自然な韓国語でのコミュニケーション能力を養うことを学習目標とする。まず、聞き取りや会話練習に重点を置き、映画やドラマ等を題材にし、さまざまな表現を学び、応用できる練習を行う。また、日記や感想文を課題にし、自分の考えや主張等を効果的に伝えるための文章力を養う。加えて、韓国語学習の成果の一つとしてハングル検定試験 2・準 2 級合格を目指し、試験対策も行う。	
	日本事情 1	原則として留学生を対象とした科目である。日本文化や大学生生活に必要なと想定される一般的な事象について提示し、受講者の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では日本の風土、芸術文化、娯楽、家族・人生観、大学生生活、衣食住文化等をテーマとして取り上げる。	
	日本事情 2	原則として留学生を対象とした科目である。日本文化や大学生生活に必要なと想定される一般的な事象について提示し、受講者の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では労働・産業構造、技術革新、教育、交通・物流、コンビニエンス・ストアなどの業態、コミュニケーションの様々な形態等をテーマとして取り上げる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国事情 1	明治維新以後、日本の近代化に多大な影響を及ぼしたのはヨーロッパ諸国であった。講義では、ペローの童話(シンデレラ)を取り上げ、そこに描かれる家族像から、ヨーロッパ近代社会を支える「家族」の意味を考え、ヨーロッパの文化・精神性への理解を深める。具体的には、ヨーロッパの地理や歴史、伝承文学、原作者ペローの紹介、夫婦と子どもの位置関係、家族内のいじめ、母親と父親の役割、日本の昔話との関係、ヨーロッパにおける精神性の基盤、ヨーロッパの昔話における「家族」の特徴等の順序で講義を行う。	
	外国事情 2	アメリカ合衆国は、今日世界最大国であり、世界に対する影響は絶大であり、日本にとって最も親密な国であり、アメリカの知識は不透明な21世紀において日本の将来を考える際に大いに参考となる。講義では、第一に今日のアメリカを理解する上で必要な基礎知識、すなわち、日米関係、アメリカ合衆国成立の経緯(歴史)、地理、人種・民族、政治、文化(文学をも含め)等、様々な分野の基礎知識を身につけ、次にこれらの知識を利用して、現代日本をアメリカと比較して検討するという視点を養うことが目的とする。	
	日本の文学 1	最も好家的な学問であると思われがちな文学を単なる教養ではなく、社会批評の学問として再認識する。「詩」や「物語」という概念を拡張し、社会の様々な物語の存在に気づくことが出来、かつそれらに批評的な視点を持つ方法を有する。授業では、日本近代「文学」研究の誕生、作家論・「作家」をめぐる物語、作品論・研究としての文学、テクスト論・研究から再び批評へ、実証研究の意義・文学の基礎、読者論・様々なレベルの読者、サブカルチャーとメインカルチャー、「文学史」をめぐる物語等のテーマについて講義を行う。	
	日本の文学 2	文学を読むことと文学を研究することは違う。文学は、作品を読み、時代や文壇のことを調べ、作家の意図をさぐる単なる謎解きでもない。今や文学だって単なる好家的な営為とは違う段階に来ている。文学史の再教育としてではなく、文学を研究する方法を講義することによって、単なる文化的教養ではなく、新たな思考法の獲得の機会とすることを旨とする。具体的には、文学を物語と考え、社会の多くの言説がその構造に支えられているということを知り、如何に物語に批評的な立場を取りうるかという方法の獲得を目指す。講義のテーマは、モダンとポストモダン、批評から研究へ等である。	
	外国の文学 1	外国文学を原著で読むことで翻訳では感じるのが難しい文化的背景や語感等を把握することを目的とする。「ハリー・ポッターと賢者の石」(シリーズ第一巻)を購読する。映画や翻訳などでストーリーになじみのある児童文学ではあるが、イギリスの子供たちにとって大前提となっている文化的事実など、異文化理解のために学ぶべきことがたくさんある。講義では原文(英語)を丁寧に読みながら、言葉の面白さにも注目し、原文の持つ響きを理解することを説明する。	
	外国の文学 2	この授業では以下のことを到達目標とする。(1)外国文学を原書で読むことに親しむ。(2)必要以上に日本語に頼らずに英文を理解する。(3)文学作品の社会的・文化的背景を理解する。(4)言葉の面白さを楽しむ。講義では、ロアルド・ダールの「チャーリーとチョコレート工場」を、次には同じくダールの短編小説を講読します。ダールの優れた人間観察力から描き出される筆致には引き込まれるものがある。講義では原文(英語)を丁寧に読みながら、言葉の面白さやイギリスの文化を理解する上で欠かせない知識などを学ぶことを説明する。	
	文化人類学 1	異文化理解の学問として始まった文化人類学の概要を学説史をたどることによって理解する。文化人類学の特徴は西欧にとって異なる社会を対象とした研究だけではなく、人間の全活動を文化として総体的に理解しようとしたことにある。そのような文化人類学の考え方を、啓蒙期から進化主義の人類学、機能主義人類学、構造主義人類学、象徴主義人類学、解釈人類学とたどっていくことで明らかにする。現代の社会における文化人類学の果たすべき役割も重要なテーマである。	
	文化人類学 2	文化人類学1で学んだ基本的な考え方をふまえて、文化人類学が扱う個別のテーマについて共に考えてみる。扱われる問題は、家族と親族、結婚、ジェンダー、宗教、ナショナリズム、グローバリズムなど多岐にわたるが、そのうちのいくつかが選ばれ解説され、学生自身の問題として討論されることになるだろう。身近な問題を通して世界をどう捉えることができるかを学生に認識させることが目標となる。自身が社会や世界とどのようにつながっているかを考えることにより、自身への理解が深まることを期待している。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	人文科学論 1	人文科学とは、辞書的には「人類の文化についての諸学問」と規定される。ここでの「文化」は、一般的に理解されている芸術文化という意味だけではなく、人類の生活様式・思考様式全般にまで及ぶ。この講義では、人類の諸文化を明らかにする切り口を設定し、人類の文化について多角的な面から考察し、いわゆる「現代社会」そのものを相対化できる、柔軟な思考力を身につけることを目指す。	
	人文科学論 2	日本だけでなく、世界的に見ても上演頻度の高いシェイクスピアの戯曲は、単にイギリスの文学・演劇であるにとどまらず、全世界で数世紀にわたり受容され、演劇のみならず、オペラ、バレエ、映画でも、シェイクスピア戯曲は表現されてきた。ドイツ、ロシアでも、シェイクスピアは数世紀にわたり、ほとんど自国の作品として受容されており、また日本では歌舞伎、能狂言の形で改作されている。いまや世界文化ともいえるシェイクスピア文化を、英文学の枠外から見直し、日本を始めとして各国の(演劇)文化にシェイクスピアがどのような衝撃を与えたかを観ていきたい。	
	日本史 1	最近の日本史研究の進展により、日本史を日本列島だけで考えることではすまなくなってきた。日本列島とユーラシア大陸、その他の諸地域との国際関係・国際交流が重視されているのである。中学校・高等学校の日本史教科書もそのような視点で書かれるようになってきた。本講義ではアジアからみる日本史として、前近代社会を中心に、古代の大陸との外交、中世の国際関係、鎖国下での国際関係等をテーマとし、日本とそれを取り巻く国際社会について歴史的に考える。	
	日本史 2	日本史 1 をうける形で、明治期以降の日本の対東アジア外交史を扱う。まず、伝統的な東アジア朝貢貿易システムを西洋型の万国公法体制に転換させようとする明治政府の基本的な外交方針を確認し、その具体的発現形態としての対朝鮮、対中国外交を概観する。それを通して、近代日本が帝国主義時代を帝国主義国として生き抜くことを決断した時点で不可避的に東アジアへの抑圧を伴わざるをえなかったことを示し、未来の対東アジア関係について考えさせる契機とする。	
	西洋の歴史と文化 1	<キリスト教を通して知るヨーロッパ史 1>キリスト教の発展と密接な関係を持っているヨーロッパの歴史をよく理解する為にはキリスト教の知識が必要である。講義では、まずイエス・キリストが生まれた時代のユダヤの状況を理解するためにメソポタミア時代からユダヤ王国建国、ローマ帝国による支配にいたるユダヤ民族の歴史とユダヤ教を概説し、その上で、イエス誕生の経緯と新約聖書に見られるイエスの言動を通してキリスト教の基礎的教義と古代キリスト教会の歴史を概説する。	
	西洋の歴史と文化 2	<キリスト教を通して知るヨーロッパ史 2> ヨーロッパの歴史はキリスト教の発展と密接な関係を持っているので、ヨーロッパをよく理解する為にはキリスト教の知識が必要である。講義では、まずキリスト教の基礎的知識を明らかにし、中世ヨーロッパ社会にキリスト教がどのように浸透したか、また、ローマ・カトリック教会がいかなる社会的勢力となったか等の問題を検討し、中世ヨーロッパ社会の特質を概説する。次に近代初頭のマルティン・ルターの宗教改革の原因と社会に対するその影響を概説する。	
	中国の歴史と文化 1	<漢字の変遷と中国の歴史> 東アジア社会では、民族と国家がそれぞれであるが、その共通性を追求すれば、漢字はその一つである。講義では、東アジアにおける共通した漢字を軸に、その歴史をさかのぼって、文化理解を深めることを目指すが、まず漢字の起源を甲骨文字まで遡り、次に史上の「六書」における漢字の変遷、秦始皇帝による漢字統一や書体の変化を、また墨や紙等、漢字の書写道具と材料の変化を明らかにし、漢字の発展が中国の歴史と文化にどのような影響を与えたかを考察する。	
	中国の歴史と文化 2	<漢字の変遷と中国文化・日本文化> 東アジア社会の共通性を追求すれば、漢字はその一つである。横文字の世界に対して、こうした共通の漢字文化は東アジアを繋ぐ一つの絆になった。東洋史の一側面として、その漢字の今昔及び各地域での様相を考察することは、まさに近年以来大いに騒がれる東アジア共同体構築の基盤を理解することとなる。講義では、西夏文字等漢字の派生文字の歴史、さらには日本字における漢字の由来等を検討することによって、中国文化と日本文化等の関連性を明らかにする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	考古学 1	考古学という学問の概説をおこない、学問の基礎的な考え方を学ぶ。先史人類の生活と文化の変遷を学ぶことによって人類と文化の発達の意味、人類と環境の関係について考える。これによって自己存在の位置づけを認識する一助とし、また過去を糧として現在と未来の生活指針を設計する態度が身につけられるであろう。講義と共に、遺跡や遺物も視覚的に捉えていく。学生にはその背後にある人間についていかに考えるかが課題として与えられるであろう。	
	考古学 2	考古学 1 を踏まえて考古学がどのように人間の歴史を理解しているかについて考える。考古学は先史文化の学問であるばかりではなく、無文字社会の歴史を理解する上でも欠かせない。幾つかの無文字社会を扱い、文化の発達と衰退について学ぶことによって、人類と環境との関係、現代と未来の人間社会について考察することを目標とする。過去を現在の自分自身に投影することによって、将来の生活指針を設計することができることを学ぶことが出来るであろう。	
	日本の芸能 1	日本には様々な芸能が存在している。民間でおこなわれてきた様々な芸能は現在でも年中行事などと深く結びついておこなわれてきている。近世になると民間の芸能が民衆を対象とする職として成立してきた。その一つが落語である。この講義では「上方落語」に焦点を当ててみる。落語の言葉は、生きた古語とも言うべきもので、落語に親しむことによって他の日本の伝統芸能、人形浄瑠璃文楽や歌舞伎などへの関心も生まれていく。広い視点から落語を日本の伝統文化の中に位置づけたい。	
	日本の芸能 2	日本が世界に誇る伝統芸能の一つとして人形浄瑠璃文楽がある。歌舞伎などとも関係が深いこの人形浄瑠璃文楽の歴史、特徴について知ることによってまた歌舞伎などの伝統芸能への関心も生まれてくるだろう。講義では概説の後に、具体的な例として作品を取り上げる。台本の購読・解説をおこなうので古文に慣れ親しむきっかけにもなる。音源資料や映像資料を使って人形浄瑠璃文楽の実際のあり方についても解説をおこなう。能や狂言、歌舞伎などといった舞台芸能についても人形浄瑠璃文楽と共に考えてみたい。また学生が関心を持ち、伝統芸能の公演に触れるようになることが期待される。	
	日本民俗学 1	日本民俗学は近代日本の学問の中においては西欧化の輸入ではない日本独自のものとして形成されてきた点で特異である。それは何よりも近代日本におけるアイデンティティの問い直しであった。その学問形成歴史を踏まえながら、日本民俗学が関心を寄せてきた日本の生活文化について講義をおこなう。生活文化を考える際には社会（人間関係）の分析が重要であることを認識したい。沖縄文化の解説をおこないながら学生には自分たちの周囲の生活文化を考えていききっかけを与えたい。	
	日本民俗学 2	柳田國男によって創始された日本民俗学は、何よりも現実を直視することにあつた。身の回りの常識を疑い、その意味を探ることにその本質はあつたともいえる。そのような日本民俗学の成果を踏まえながら、我々の生活文化の再検討をおこなうことを目標とする。親子関係、婚姻関係、ジェンダーとセクシュアリティ、老い、生活革命、年中行事の変化、伝統文化の作られ方などが問題となるであろう。近年の日本民俗学の新しい展開を踏まえながら、これらの問題について概説をおこなう。学生は感心に合わせて身の回りの生活文化に関するレポートを作成する。	
	自然科学史	「顕微鏡」といえば、肉眼ではみにくいものを拡大して観察することができる道具として、ほとんどの方がプラスのイメージを持つであろう。しかし、17世紀におけるその普及が、実は発生学の分野においては後退を招くものであつたという事実は広く知られていない。本講義では、博物誌と生命論、不老不死思想と錬金術の関係、原子論と分子論、周期表の誕生、分類学と進化論、自然発生説等を題材に、科学の光と影、失敗と成功の「おもしろさ」を味わいながら、科学とは何かを改めてとらえ直してほしい。	
	図像学	美術作品といわれるものの中でも、文化や宗教の違う国の作品や、日本でも古い時代の作品には、予備知識なしに見ただけでは理解できないものもある。そこでこの授業では、西洋・東洋の宗教絵画・物語絵画の意味を、ギリシャ神話・聖書・仏教・日本の伝説や物語などを通じて学ぶ。その姿や場面の意味するものや、物語の内容を知ることによって、個々の絵画を理解するのみならず、各国の物語や神話を比較しつつ鑑賞することにより、多様な文化への興味を深めることも期待される。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	人文科学論 3	日本文化論・日本人論というのは、ブームになっている。その論点は、日本文化や日本人の独自性・特殊性を論ずるものが多いようである。しかし文化は、相互交流の中から生まれ、そこには独自性とともに普遍性も存在するといえる。この講義では、いわゆる「日本文化」を対象にして、文化の持つ特殊性と普遍性の問題について考える。具体的には、福沢諭吉・柳田国男等、「日本文化」に関わるいくつかの言説について紹介しながら検討する。	
	人文科学論 4	日本の列島社会やそれをとりまく地域の中にはさまざまな文化圏が存在している。いわゆる日本文化は、そのような文化との影響を受け、さらには相互交流・受容の中から生み出されたものといえる。本講義では、列島をとりまく文化圏と日本文化との関わりについて、具体的な事例から考えたい。縄文文化と弥生文化、山の文化と海の文化、琉球文化とアイヌ文化、中国・朝鮮文化と日本文化、ヨーロッパ文化と日本文化等をテーマにして学ぶ。	
	日本史 3	高校まで学んだ知識を再確認しながら、19世紀後半、すなわち幕末維新期以降の日本が歩んだ歴史を概観していく。特に、欧米諸国などの近代国家建設を目指した日本が、いかなる葛藤や矛盾をみせながら、新たな社会を形成していったのか、政治経済面、対外問題、戦争を中心にいくつかの事例をとりあげて講義する。そのうえで、高校までに学んだ歴史の知識と、実際に語られる歴史の差異をいかに把握すべきか、受講者とともに考えてみたい。	
	日本史 4	高校までの日本史は、政治面を中心にしながら主に国家の歩みを教える内容といえる。その一方で歴史を形作るのは、いつの時代であろうと、人やモノの移動・交流がおりなした所産にほかならない。そうした、高校までは詳しく教えられることのなかった歴史のうち、世界規模での移動・交流が盛んになった近代の日本を舞台としながら講義していく。また、近代的価値観を求められた激変の時代のなかで、人びとはいかなる価値観をいだいていたのか、モノの交流がいかに社会を変貌させていったのかについても注目して講義してみたい。	
	社会の仕組みと人間の営み 1	この科目では社会学的なものの見方や考え方を学んでいくことを第1の目的とする。日常生活において当たり前すぎて気にもとめない、私たち自身の行為や他の人々との関係のあり方、あるいは、私たちが取り巻く様々な社会の制度について取り上げ、それらがどのような意味をもつのかを考える。具体的には、社会学とはどんな学問か、私と社会、アイデンティティ、国民であること、エスニシティ、エスニック・スクール、関係を築く、地域社会とエスニシティを取り上げる。	
	社会の仕組みと人間の営み 2	社会学的なものの見方や考え方を身につけながら、私たちが取り巻く社会がどのような仕組みをもち、そのなかで私たちがどのように生きているのかを考える機会としたい。本科目では、具体的に次の内容になる。はじめに、社会制度のなかにおける教育と学校について考察し、その中で外国人児童生徒問題を取り上げる。さらに、集りのなかにおける個人と集団というテーマについて考え、現代社会全般について考察を発展させる。	
	法学 1	本科目は法学を専門としない学生を対象として、法の基本的な知識を習得させることを目標とする。それゆえ最初に我々の通常の生活に存在する法を指摘し、社会における法の役割を考え理解する。その次に、法と他の社会規範との比較、法の効力の範囲、法の分類、法的関係としての権利と義務、法の適用と解釈等の課題を通じて法を多角的視点から学んでいく。	
	法学 2 (日本国憲法)	本科目は法学を専門としない学生に、最高法規である日本国憲法の基本原理を理解させることを目標とする。最初に憲法を理解するために憲法概念、近代憲法の原則等の基本を論じる。次に日本国憲法の原理を明らかにし、平和主義の理念、統治組織としての国会、内閣、裁判所の各々の性格と権能、人権保障の意義と種類等を学んでいく。尚、法学2に入る前に、法学1の知識を習得しておくことが望ましい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	現代政治を読み解く 1	<p>若者の政治離れが指摘される一方で、インターネットでは無責任で過激な政治的主張が若者の間で展開されている実状がある。受講生が政治上の重要テーマを学習し、偏った見方に陥ることなく、自分なりの政治に対する意見と市民としての自覚を持つようにすることが、本講座の目的である。</p> <p>「現代政治を読み解く 1」では、そのような観点から、憲法 9 条の問題や日本の国際貢献、自衛隊の P K O 参加など、重要な政治的テーマを取り上げ、その背景にさかのぼって詳しく解説を行う。</p>	
	現代政治を読み解く 2	<p>若者の政治離れが指摘される一方で、インターネットでは無責任で過激な政治的主張が若者の間で展開されている実状がある。受講生が政治上の重要テーマを学習し、偏った見方に陥ることなく、自分なりの政治に対する意見と市民としての自覚を持つようにすることが、本講座の目的である。</p> <p>「現代政治を読み解く 2」では、今日の政治状況を考えたときに、欠かすことができないと考えられるテロリズムの問題、そして日本の安全保障の問題を特に取り上げ、詳しく解説を行う。</p>	
	社会科学論 1	<p>社会科学は政治学、経済学、法学、社会学など、多様な分野から構成される学問である。講義では、政治、経済、憲法・法律、社会にかかわる様々な問題を扱うことで、受講生が社会科学に対する全体的イメージをつかめるように心がける。</p> <p>「社会科学論 1」では国家の役割や民主主義の歴史と概念、アメリカやイギリスの政治制度、さらにはエネルギー問題などを取り上げる。</p>	
	社会科学論 2	<p>社会科学は政治学、経済学、法学、社会学など、多様な分野から構成される学問である。講義では、政治、経済、憲法・法律、社会にかかわる様々な問題を扱うことで、受講生が社会科学に対する全体的イメージをつかめるように心がける。</p> <p>「社会科学論 2」では、各国の選挙制度、日本国憲法、人権問題、地球環境問題などを扱う。現代社会が直面する様々な問題への関心を深め、学生が自分なりの見方や考察ができるようになるのが、本講座の重要な目的である。</p>	
	国際関係論 1	<p>世界は日々刻々、ダイナミックに動いている。重要なことは学生の国際的視野を養い、外の世界の動きへの関心を高めることである。</p> <p>「国際関係論 1」では、まず基礎固めの意味で、国際社会の生成と仕組みを詳しく学習し、その後、国際連盟、国際連合、その他国際機関の活動、国連平和維持活動 (P K O)、日本の政府開発援助 (O D A) などの重要事項について扱うことになる。</p> <p>また必要に応じて、最新の世界情勢に関する解説も行う。</p>	
	国際関係論 2	<p>世界は日々刻々、ダイナミックに動いている。重要なことは学生の国際的視野を養い、外の世界の動きへの関心を高めることである。</p> <p>「国際関係論 2」では、戦後の国際社会の歴史を取り扱う。すなわち冷戦の開始から終結にかけての流れを詳しく学習し、さらに冷戦後の混沌とした世界情勢についての解説を行う。国際社会がこれまで歩んできた歴史をきちんと学習してこそ、今日の世界情勢への理解も深まると考えられる。</p>	
	21 世紀経済への視点 1	<p>21 世紀を迎えた今日、日本はずいぶん豊かになったはずだが、暮らし向きはむしろ厳しくなってきた。なぜなのだろうか。経済格差や人口の減少も問題になっている。われわれの暮らしはこれからどうなっていくのだろうか。経済学の基礎知識を利用しながらこんな疑問に答えていく。具体的には、マクロ経済主体の結びつきと国民所得、家計、企業、政府、外国、グローバル化の波、国民所得、金融・財政政策、マーケットにおける価格の決定、消費者の合理的行動、生産者の合理的行動、市場メカニズム、競争の利益と不利益を取り上げる。</p>	
	21 世紀経済への視点 2	<p>本科目の目標は、日本経済の流れを考えつつ、身近な経済現象などについて知り、そして、本当の暮らしの豊かさ貧しさについて考えることである。具体的には、経済と経済観の変遷、高度経済成長、豊かな社会、モノの豊かさよりも心の豊かさを、国債の大量発行問題、自由化への動き、規制緩和と構造改革、失われた 10 (15) 年、少子高齢社会の恐怖、産業資本主義からポスト産業資本主義へ、家庭を取り巻く経済環境の変化、円高・円安の不思議 (円高で得する人と困る人)、消費と貯蓄 (ミクロの考え方とマクロの考え方) を取り上げる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	グローバル時代の経営 1	企業経営活動は生産活動である。それは利潤の生産と財やサービスといった商品を生産する。その生産過程では、生活の糧を提供したり、人々の「豊かさの創造」機会を生み出したりもする。企業が存続するためには、利潤達成と同時に、社会的責任の遂行がなされなければならない。具体的には、経営学とは何か、企業の基本的な特質、企業形態、株式会社制度の特質、企業集団、コーポレート・ガバナンス、企業経営とステークホルダー、中小企業論、非営利組織論等を取り扱う。	
	グローバル時代の経営 2	経営学を幅広く理解することと現実の企業経営における諸問題を整理し、考察するための方法論を学ぶ。本講義では、こうした観点に立って企業経営を考えるとともに、グローバル時代における経営戦略という視点を導入する。具体的には、経営学史を学ぶ、科学的管理法、科学的管理法の深化、管理過程論と管理原則論、人間関係論、現代組織論の源流、環境適応理論、経営戦略論、人的資源管理論、日本の経営論、国際経営、環境経営、CSRと企業倫理という個別テーマを取り上げ、話題を展開する。	
	情報社会文化論 1	文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から見る。とくに本科目では、情報の意味について理解することからはじめ、量として測れることを知る。ひるがえって、遺伝子情報、人間の記憶能力、文明の発祥と文字の発明、粘土板・パピルス・紙といった記録媒体、社会的記憶装置である図書館などについて、古代からギリシア時代あたりまでを概括する。歴史の発展、文化・文明の展開を「情報」という視点から見る「情報史観」を導入する。	
	情報社会文化論 2	文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から見る。紙の発明は人類に何をもたらしたか、同様に、印刷術の普及はどうかであったか、また、レコードやフィルムといった音声・画像・映像などの情報メディアが社会や文化にどのような影響を及ぼし変革をもたらしたのかについて学ぶ。さらに、数表、計算する道具、電子計算機など、情報社会を形作ってきた事物・事象の生成・展開について、原動力となった要因を社会的・歴史的・文化的背景を踏まえて概説する。	
	生涯学習論 1	生涯学習時代といわれて久しいが、この科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、生涯学習・生涯教育論の展開と学習の実際、生涯学習社会における家庭教育・学校教育・社会教育の役割と連携、生涯学習振興施策の立案と推進、教育の原理とわが国における社会教育の意義・発展・特質等を取り上げる。	
	生涯学習論 2	この科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、社会教育行政の意義・役割と一般行政との連携、自治体の行財政制度と教育関連法規、社会教育の内容・方法・形態（学習情報の提供と学習相談、評価を含む）、学習への支援と学習成果の評価と活用、社会教育施設・生涯学習関連施設の管理・運営と連携、社会教育指導者の役割を取り上げる。	
	図書館の基礎と展望	図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を解説する。具体的には、図書館の現状と動向、図書館の構成要素と機能、図書館の社会的意義、知的自由と図書館、図書館略史、公立図書館の成立と展開、館種別図書館と利用者のニーズ、図書館職員の役割と資格、図書館の類縁機関・関係団体、図書館の課題と展望などを取り上げる。	
	社会に生きる私たちの人権	「人権」という言葉を辞書で引くと「人間が、人間として当然に持っている」とされる権利。基本的人権。」とある。この権利は、わが国では日本国憲法によってすべての国民に保障されているのだが、果たしてどうであるのか。わが国の歴史のなかには、多くの差別の事例が見られる。また、世界を見渡せば、国や地域によって、必ずしも完全な形で人権が守られているとはばかりは言えない状況がある。人権や差別にかかわる思想的・歴史的な経緯を確認しながら、人種・性・障害者などの差別問題、学校・職場におけるハラスメントについて考えていく。	
	女性の生き方	一般に女性論・女性学は、社会的存在としての女性について、その自立などを論じる。だがそれは、自然的存在としての女性を忘れることであってはならないだろう。むしろ社会的存在としての女性を論ずるためにこそ、社会的及び自然的存在を包括する「自然（ジネン）的存在」としての女性が見られねばならぬ。したがって、女性の生き方と言っても、単に社会の中で女性はいかに生きるかのみを問題とするのではなくむしろ女性の存在を通じて謂わば新たな自然存在論を試みるというのが本講義である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	地図を読む	自分の進むべき道を自ら発見し、たくましく生きることの大切さを体験的学習する。「地図」と呼ばれるものには、例えば、国土地理院発行の「地図」や、哲学的な意味での人生の「地図」など、様々なものがある。講義では「地図」という言葉をキーワードに、教科書のみ依存した学習ではなく、人生を歩む上で役立つ実践的な知識も学ぶ。	
	ボランティア論	他人のために自分は何ができるかと考えたことや、他人や社会に役立ちたいと思ったことはないだろうか。社会には援助が必要な人々や無償の労働が必要な分野がたくさん存在する。そこで、ボランティアということを考えてみよう。この科目では、自分のボランティア体験を振り返り、まず、ボランティアという言葉に対する自分のイメージを検証することから始める。そして、ボランティアとは何か、その活動分野、受ける側の考えとニーズの理解、必要な態度とルールの理解、歴史と基本的理念、市民参加の重要性、NPOとNGOを取り上げる。	
	情報法制論	平成17年4月に完全施行された個人情報保護法をはじめ、情報公開法・著作権法など、情報をめぐる個人・法人の権利の保護に関する法律を中心に、その制定経緯から説き起こし、理論上・実務上の要点を解説する。特に、マスメディアや企業内で活躍する際に特に留意すべき法的争点を取り上げる。具体的には、法律学における「情報」、マスコミ倫理と法制度、「知る権利」、プライバシー保護、コンプライアンス、著作権の歴史、著作権法の基本概念、パブリシティの権利、不正競争防止法・企業秘密、工業所有権法の基礎、ビジネスモデル特許を取り上げる。	
	地球惑星学 1	本講義概要は地球惑星科学の基礎を学び理解することである。地球惑星学1では「地球表層、マントル、コアのダイナミクス」すなわち「プレートテクトニクス理論」と「ブルームテクトニクス理論」の概要と原理を学ぶ。さらに太陽系誕生のメカニズムと「46億年前の地球誕生から生命誕生」までをひも解く。講義内容は最新の研究成果及び話題を織り交ぜ解説する。	
	地球惑星学 2	本講義概要は「46億年の地球史」を学び、「地震」と「火山」の概要と原理を学ぶ。とくに地球誕生から46億年かけて形成した気圏、水圏、地圏、生物圏における物質、エネルギー循環とその相互作用について学び、地球を一つのシステムとして捉え、地球環境の変動メカニズムについて理解する。講義内容は最新の研究成果を織り交ぜ解説する。	
	科学技術論 1	現代社会における科学技術の発達は見れば見る物があるが、我々はそうした中で社会生活を送らなければならないのも事実である。そこで、科学技術論1では例えば将来必ずや身近な物となるであろう介護用ロボットをはじめとするロボット開発の現状や衝突しない自動車の開発、さらにはリアモーターカーによる高速鉄道の簡単な原理など、それぞれのテーマに関する最先端技術について正しく理解するための知識を分かりやすく講義する。	
	科学技術論 2	科学技術論2では、我々が生活する上で欠かせないエネルギー問題をメインテーマに講義計画を立てており、例えば現在の社会生活において欠かせないエネルギー源である原子力エネルギーの安全性とその重要性について、また、地球外資源の開発と言う観点から国際宇宙ステーションを中心とした宇宙開発の必要性和現状について等より具体的な内容で構成する。我々は好むと好まざるとに係らず最先端科学技術の真ただ中で生活するわけで、それに対する正しい知識を持つきっかけとなればと考えている。	
	統計学 1	統計学の本質を出来る限り解説し、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って講義中に取り上げる。たとえば単回帰分析、3つの変数の関係を知る法、正規分布、標準化、Zスコア、Tスコア、偏差値、五段階評価、統計的仮説検定、平均値の検定。	
	統計学 2	統計学の本質を出来る限り解説し、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って講義中に取り上げる。たとえば新旧両製法を比較する法、統計的推定、等分散検定、平均値の差の検定、2つの母集団の異同を判定する法、同一人に2つの処理をした場合の結果の差の判定法、適合度検定。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	基礎数学 1	コンピュータ技術、CD/DVDの読み取り、経済、金融、金利、統計、測量の他、Excelでの処理等、日常生活で数学に関連する事柄は多様である。基礎数学 1 では、整数、二次方程式と関数の初歩、数列、微分積分の基礎、確率と統計に関する内容を出来るだけ身近な話題と関連づけて扱うことにより、数学の基礎的素養を習得し、問題を論理的に考えられる力を養う。また、いくつかの物理や自然現象と数学の関係についても触れる。	
	基礎数学 2	日常生活で数学に関連する事柄は多様である。また、数学は物理学・天文学の問題を解きたいという欲求から発達したという一面も持っている。基礎数学 2 では、ピタゴラスの定理、直線、平面、円、面積、体積の計算といった幾何学を中心に日常生活と数学に関するトピックを出来るだけ身近な内容と関連づけて扱う。授業を通して、数学の基礎的素養を習得し、問題を論理的に考えられる力を養う。また、いくつかの物理や自然現象と数学の関係についても触れる。	
	生物学 1	本講義では「食と人間」をテーマに、我々の日常生活における様々な要素とその意義をとらえ直すことにより、「生物とは何か」「人間とは何か」「生きるとは何か」を考えることを目標とする。前半では、我々はなぜ食事をとるのか、食べたものはどこに行くのか、人間はなぜ動くのかといった講義を通して「食からだ、行動」のプロセスを論じる。後半では、生命の起源、生物の変遷、人類の歴史と絡めながら、生態系における人類の「住と食事」を論じる。	
	生物学 2	生物の示す多くの現象は「遺伝子」に書き込まれている情報の発現調節に因る所が大である。このことを踏まえて、身近な遺伝現象の調節機構・「遺伝子」の概念・「遺伝子」の実体を理解することを旨とする。併せてヒトが現生の生物の中で特別な存在ではないことを理解し、特別な存在である自分を考える基盤を作って欲しい。	
	物理学 1	人類は昔から宇宙や自然の本質に大変関心を抱き、自然現象を色々な形で日常生活に採り入れてきた。物理学 1 では身近な太陽系の中での話題を中心に講義を進める。一見複雑に見え、別々の約束事にしたがっているように見えるさまざまな自然現象が、実はいくつかの基本的な物理法則という約束事で説明出来る事を学習する。また物理学の発展の歴史をたどり、何が原因で何が結果であるか、という因果律を学ぶ事で問題解決に対する取り組み方や論理的なものの考え方を学ぶ。	
	物理学 2	銀河系とその外に広がる宇宙の姿、系外惑星の発見と地球外生命に関する話題、20世紀初頭に誕生した相対性理論の世界を紹介する。さらに、ハッブルによる宇宙膨張の発見とビッグバン理論とその観測的証拠である宇宙背景放射の発見とそこから読み解く現在の宇宙の姿を扱う。また、宇宙に存在する様々な物質が究極的にはクォーク等の基本粒子によって作られており、これらが宇宙誕生の際いかに物質が作られてきたのかについても触れる。	
	化学 1	現代に生きる者として必要な教養としての以下に示す化学の基礎を身につけることを目標とする。(1)原子の構造について説明できる。(2)元素の種々の性質と原子中の電子配置の関係を説明できる。(3)化学結合の種類や特徴について、結びついている原子やイオンの性質と関連づけて説明することができる。(4)物質を原子、分子、イオンといったものの集合体としてイメージすることができる。(5)化学式・化学反応式の意味を理解し、正しく読み書きができる。	
	化学 2	私たちの身のまわりの生活や私たちの体に関わる化学現象、化学技術について理解し、各人が生活の中で化学とつきあうための教養を身につけることを目標とする。生活で使っている製品や私たちの体を構成している物質について、どのような化学的な意味があるのか正しく理解し、(1)私たちがどのようにして金属を利用しているのか、化学的性質に基づいて、(2)私たちの身のまわりの様々な有機化合物について、その性質や用途を化学的に、(3)私たちの体をつくっている物質について理解し、説明できるようになることを目指す。	
	自然科学入門 1	自然科学の発展の歴史や現代の自然科学の進歩、功績や問題点の学習を通じて、自然科学という学問の全体像を理解し、科学的見方、考え方を目標とし、「自然科学」への入門についての講義をする。そのために、自然科学の発展の歴史、宇宙、物質とエネルギー、地球環境、生命などを中心に講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	自然科学入門2	自然科学の発展の歴史や現代の自然科学の進歩、功績や問題点の学習を通じて、自然科学という学問の全体像を理解し、科学的見方、考え方を目標とし、「自然科学」への入門についての講義をする。そのために、自然科学の発展の歴史、宇宙、物質とエネルギー、地球環境、生命などを中心に講義する。なお、自然科学入門 で取り扱う内容を踏まえて講義する。	
	生物学3	「遺伝子」の働きが明らかになる現象の一つが生物の形作りである。動物が示す多様な形を生み出すシステムの実体が多く遺伝子の発現調節の絡み合いであること、その鍵になる遺伝子が見つかることを理解して欲しい。さらには、人類が生物を改変する力を手に入れようとしている今日、生物としての自分の尊さを理解し、これからの充実した人生を紡ぐための礎として欲しい。	
	生物学4	微生物は時に黴菌と呼ばれ、病気や食中毒を引き起こす悪者のイメージがある。しかし、発酵食品をはじめ医薬品、環境修復等さまざまな分野で微生物が利用されている。本講義を通して、微生物の「素晴しさ」「おもしろさ」が伝わる事を期待する。具体的には、「味噌、醤油を考える」「清涼飲料水と微生物」「抗生物質とバイオ医薬品」「微生物でまちづくり」のように、我々の生活、産業、医療・福祉、環境などにおける微生物とその利用例を紹介する。また、組換えDNA技術等の倫理的問題、循環型社会の構築等の資源・環境問題に関して議論する。	
	人類と環境	現代社会において環境問題は避けて通ることの出来ないものの一つとなっている。本講義では一般的に語られる環境問題とは異なり、環境とは何か、人類と環境との関わりとは何かを問い直すことによって環境問題への関心を高めることを目的とする。私たちが暮らす地球環境そのものの理解、生物は如何にして多様な地球環境に適応し多様な地球環境を形成しているかについての理解、人類の様々な環境への適応のやり方、人類社会における環境利用の方法、人類の歴史と環境との関わり方の理解などについて授業を行う。	
	特別講義1	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	
	特別講義2	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	
	特別講義3	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	
	特別講義4	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 経営学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	学 科 共 通 科 目	自立と体験2	会社設立、事業計画づくり、商品計画・販売計画・プロモーション計画、さらに販売および決算という、一連の具体的な起業体験を通じて、企業運営の面白さ、難しさを実感し、実体験に基づく深い企業活動の理解と職業意識を培うこと目指す。また、4年間の学生生活のスタートに際して、これら起業体験を通じて、就職、さらなる将来のキャリアをどのようにつくっていくかのイメージを描けるようにすることを目標とする。
		経営学概論	経営管理を中心として、広く経営学の対象科目全般に関する基本的な概念や理論の理解を目指す。具体的には、「経営とは何か」「組織とは何か」といった広義の経営学の基本的な考え方について、生産管理、マーケティング、財務管理、組織、人材マネジメント、アントレプレナーシップ、の各視点から、講義形式により、基本的な考え方を具体的な企業および組織の事例を交えて理解をし、経営学の基礎的用語、概念、理論を理解する。
		簿記論	会計科目の基礎として、企業会計の技術的側面である簿記の技術を習得する。簿記とは、企業の経営活動において発生する取引を記録し、それらを要約して企業の財政状態と経営成績とを計算・確認する技術である。この講義ではまず、複式簿記の原理について説明し、次に商品売買業の企業において行われている簿記の基礎的な方法について修得させる。具体的には、企業活動と簿記の意義および目的について 企業活動と企業資本 企業資本と貸借対照表 企業資本と利益 費用・収益と損益計算書 簿記と取引 勘定とその記入法 仕訳と転記 仕訳帳と総勘定元帳 試算表の意義と作成 6桁精算表の意義と作成 決算の意義と方法 等を取り上げる。
		経営戦略論1	戦略論の基本概念を学び、競争戦略論や資源ベース理論などの基礎理論を学ぶ。また、代表的な戦略策定のための分析方法について、実践的に学ぶ。基本概念としては、戦略とは何か、企業ビジョンとは何か、経営資源とは何かについて学ぶ。理論については、顧客適応戦略、マイケル・ポーターの競争戦略論、多角化戦略とアライアンス、資源ベース理論などを具体的な企業戦略の実例を用いて学ぶ。代表的な戦略分析の方法論としては、SWOT分析やPPM分析などについて、具体的な企業を選んで実際に分析を行い、実例と比較することで、分析から戦略策定までの考え方や手法を身につける。
		マーケティング論1	ビジネスの売れる仕組みについて学習する。市場との関係で製品のコンセプトをどのように開発するのか、競争優位となる価格設定をどのように行うか。また、広告などのプロモーションをどのように有効に活用するか、そして、顧客にアクセスするチャネルをどのように設計・管理するかなど、について具体的な事例を通して講義する。また、マーケティングとは、売るための技術だけでなく、企業理念としても理解することが重要である。モノが売れないと企業が悩む時代に、マーケティングの意義をしっかりと理解する。
		会計学概論	会計および会計学の体系を理解させ、その後の会計科目の履修にあたっての指針とさせる。具体的には 企業会計の意義 企業会計の目的 財務諸表の意義 利益の計算 複式簿記 財務会計 管理会計 原価計算 経営分析 会計情報システム 等を取り上げる。
		経営基礎1	ビジネス人に必要なコミュニケーション能力と問題解決能力を身につける。後期の経営基礎2と連続する授業である。前期は、コミュニケーション力(聞く力・話す力)と読解・分析力を中心に学習する。特にコミュニケーション力では、大学生・社会人としての意識改革を行う。読解・分析力では、国語・数学のリメディアル学習を集中的に行う。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 共 通 科 目	経営基礎 2	前期の経営基礎 1 に続き、問題解決能力の向上に進む。前半は、起業体験の準備と実施が中心になる。グループ単位で仮想会社を設立し、事業の企画から調達や製造、販売準備を学生自身が進めて、模擬店として実際の販売活動を体験し、最後に決算報告まで行う。前期で養った基礎力を高め、意識と態度行動の変革を目指す。後半は、企業に対する理解を深めるケーススタディの演習と、プレゼンテーション力の養成を行う。	
	経営基礎 3	1年次で身につけた問題解決能力とコミュニケーション能力を発展させて、企業経営の問題を深く考える学習を行う。各学生が興味を持っている業界や企業の現状や課題について、調べてとりまとめ発表、グループ討議することを通じて、経営戦略や経営組織、マーケティング等への視点を深める。	
	経営基礎 4	前期基礎 3 に続き、より情報量の多い企業のケーススタディを扱い、問題解決能力を発展させる。財務資料を含む詳細な企業の外部環境と内部環境の情報を与え、企業が直面する経営の問題点をつきとめ、これを戦略、組織、会計、マーケティングの知識とフレームワークを使って構造化する。そして、業績改善のための経営改善策を提案・発表する。ここで学習した知識と経験は、他の起業体験科目やゼミナールに役立ter。	
	ゼミナール 1	担任教員別に少人数で実施する3年次の前期演習科目である。経営基礎 1、2 及び 3、4 で身につけたコミュニケーション能力と問題解決能力をさらに発展させ、個別の経営課題について、業界研究、ケーススタディ、産学公連携活動など、さまざまな方法で、実践的な社会人基礎力を向上させる。	
	ゼミナール 2	前期ゼミナール 1 に続く3年次の後期演習授業である。主に各学生が進路方向として興味を持っている業界や、主要企業の個別の経営課題等について、業界研究、ケーススタディ、産学公連携活動など、さまざまな方法で、実践的な社会人基礎力を向上させる。	
	ゼミナール 3	担任教員別に少人数で実施する4年次の前期演習科目である。3年間で学習した問題解決能力や業界研究の方法、さらに経営戦略、組織、会計、マーケティング、情報処理の知識を基礎に、興味・関心のあるテーマ（企業経営、業界研究、シミュレーションなど）を選び、ケーススタディや経営学方法論の技法を用いて論文や課題作成に取り組む。	
	ゼミナール 4	担任教員別に少人数で実施する4年次の後期演習科目である。前期に続き、論文や研究課題を取りまとめ、提出後に発表会を行い、成果を報告する。4年間の学習を1つの成果物に仕上げることで、ビジネスにおけるさまざまな問題の解決に役立ter。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 目	学 科 共 通 科 目	卒業研究	4年次の科目で、ゼミナール3及び4と合わせて履修する。内容は、ゼミナール3及び4の担任教員別クラスの中で卒業課題に取り組む。卒業課題には、論文や研究レポート、ケーススタディなどの形式で、企業経営に関する調査、事例研究、実験、シミュレーションなどの成果をまとめるものがある。担任教員に個別指導を受けながら完成させ、その成果は発表会にて報告する。	
		経済学概論	経済理論は、ミクロ経済学とマクロ経済学の2つに大別できる。この講義ではまず、マクロ経済学の主たる基礎理論を学び日本経済についてマクロ経済学の理論と関連づけて理解する。講義の中心は専らミクロ経済学である。需要の理論、消費者行動、供給の理論、需要曲線と弾力性、市場の理論、そして生産関数と均衡条件等の理論を講義する。利潤極大化モデルや企業付加価値分析に関して今日の企業経営でどのように用いられているかを具体的な事例を示しながら分かり易く説明する。	
		ビジネス法	ビジネスに必要な法知識について、「ビジネス契約と法律」をテーマとして基本的な理解をすることを目標とする。その主な範囲は、民法や商法総則、会社法などである。それら法理論の基礎の解説に加えて、企業間の契約締結実務、契約上の紛争とその予防、解決に至る道筋などについても具体的に解説する。また、ビジネスの不正防止に関わる独占禁止法、不正競争防止法、不当景品類及び不当表示防止法などの基本についても解説する。	
		経営学方法論1	経営学を学ぶにあたっての方法論を体系的に学習する。第一段階としては、情報の正しい入手の方法、取り扱い方法、加工方法について学ぶ。第二段階としては、経営学を研究するにあたっての質問票調査（アンケート調査）、面接調査（インタビュー調査）の方法について学ぶ。具体的には、質問票（アンケート）のデザイン、配布・回収方法、データの収集についての知識と方法を学ぶ。	
		経営学方法論2	経営学方法論1の学習成果を基礎に、第1に、業界研究の方法を学ぶ。企業の財務状況や戦略、事業展開について同業他社間の比較分析を行い、各社の強みや弱みを抽出できるスキルを養う。学生が興味を持つ企業とその業界を選び、業績と財務データの分析を始め、戦略と事業展開について各社間の特徴を比較整理して発表を行う。第2に、定量調査の方法を学ぶ。企業や消費者への質問票を設計し、実際に収集を行う。収集したデータは、基礎統計と統計分析を行い、因果関係を探る。調査を通して、仮説の構築と因果関係の検証という仮説思考を養う。	
		起業実務1	本講義は、1年次の必修科目である「自立と体験2」起業チャレンジプログラムの応用編である。大学内で開催される文化祭に企業として露店を出店し、経営についての仕組みをより詳しく学ぶことになる。起業チャレンジプログラムと比較すると、顧客や商品企画が限定されずに、よりオープンな形で経営の意思決定が可能になる点に特徴がある。内容としては、市場調査、マーケティング戦略の決定、商品企画、販売実演、決算といった経営の流れを通して、より実践的な経営スキルを身に付けることとなる。	
		起業実務2	本講義は、1年次の「自立と体験2」、2年次の「起業実務1」を踏まえたうえで、最終的に最も実際の経営に近い形で、起業体験を実施するというものである。近隣で開催されるイベント等に出店し、起業家としての知識とアントレプレナーシップを身に付け、実社会で即戦力として活用できる能力を身に付けることを目的としている。ビジネスモデルの作成は、企画段階、販売実演、決算まで、全て学生が習得した知識をフルに活用することが求められ、この講義を通して、経営全般を見渡す能力を身に付けることが可能となる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目	学 科 共 通 科 目	経営学特講 A (ブランディング)	ブランド経営とCSR企業と消費者の関係について、「環境」、「公正」、「共生」などの概念の重要性が高まっている。そうした企業社会において、それらの取り組みの先端を走る企業が、どのような考え方をもち、どのように取り組んでいるのか、について企業担当者をゲストスピーカーとして招聘し講義することを通じて、CSR (企業の社会的責任) への取り組みの現状と課題についての理解を深める。	
		経営学特講 B (地域経済)	地域経済社会は、国や近隣地域との相互依存性と地域独自の自立性・固有性を持つ。本講義では、まず地域経済の自立性・固有性を形成する基盤となる我が国における地方自治制度の概要、特に地方分権と地方財政について確認する。また、地域における産業構造や人口構造などの動態とその基本的なとらえ方、地域産業政策の課題について理解する。 それらを通じて、とりわけ首都圏と首都圏における多摩地域の経済への視点と理解を深める。	
		経営学特講 C (地域企業)	明星大学の地元である多摩地区の主要企業の経営者や実務担当者をゲストスピーカーとして招き、各企業の事業展開への取り組みについて講義を受ける。併せて、コーディネータ教員および学生を加えた3者によるディスカッションを行う。それらの実体験を通じて、地域企業についての理解を深めるとともに、経営戦略や経営組織、マーケティング、会計の各分野における課題や問題解決への取り組み法について修得する。	
		経営学特講 D (地域産業)	明星大学の地元である多摩地区の金融機関、業界団体、地方自治体の代表者や実務担当者などをゲストスピーカーとして招き、その取り組みについて講義を受ける。併せて、コーディネータ教員および学生を加えた3者によるディスカッションを行うことにより、地域産業の動向と課題への理解を深めるとともに、課題の解決策を見つけたプロセスをディスカッションを通じて修得する。	
学 科 目	学 科 専 門 分 野 科 目	起業・戦略分野		
		経営組織論	集団とは何か、組織とは何か、企業とは何かについて、経営組織に関係のある基本的な概念と理論を理解する。具体的には、マイクロ組織論の範疇である個人のモチベーション、意思決定メカニズム、リーダーシップ、小集団 (グループダイナミクス) などについて、代表的な理論の解説を行い、具体例を提示する。後半では、マクロ組織論の範疇である組織の構造と機能について、分業と調整メカニズムの観点から解説を行い、官僚制とネットワーク組織、企業間関係、組織文化、組織変革などについて、同じく具体例を用いて実践的に理解することを目標とする。	
		人的資源管理論	企業における人材を重要な経営資源として扱い、経営における人的資源管理の役割をはじめ、人材の雇用管理、人材開発、人事考課、賃金管理、福利厚生、労使関係管理など、様々な管理活動である人事システムについて取り上げるとともに、雇用の流動化、多様化など人事を取り巻く環境変化や、職能資格制度など人材の管理活動を統合したトータル人事システムについても取り上げ、企業における人材の重要性とその人材をいかに効果的に育成・活用するのかについて理解することを目標とする。	
		経営戦略論 2	一流といわれる企業においても、なんらかの理由で業績が低迷したり不祥事を起こして倒産したり、企業再生法の適用を受けることもある。本講義では、企業が経営不振に陥る理由、ならびに企業が再生していくプロセスを、実際の事例から、企業の経営不振の原因や企業再生にとって必要な要件を理解するとともに、グループワークを行い、問題点の抽出と構造化・可視化の手法を学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 分 野 科 目 起 業 ・ 戦 略 分 野	経営史	本講義では、マネジメントの歴史といわれた20世紀におけるマネジメントの変遷をたどるとともに、特に戦後の日本企業の歴史を振り返り、日本的経営（終身雇用、年功序列、企業内組合）の特徴や転換期にある日本的経営の今後について講義をおこなう。	
	ビジネスゲーム	マネジメントゲームを使用した会社経営の体験シミュレーションを行う。経営戦略、人的資源管理、財務会計、マーケティング、オペレーションマネジメントの学習を総合的かつ具体的に理解するのが狙いである。資本金と必要な借入れを行って会社を設立し、製造業のビジネスを行う。製品は材料から投入して生産する。その後、全国の市場で価格設定を行って販売する。グループの受講生はライバル企業となり、競争に勝ちながら収益の拡大をめざす。決算では、製造原価の算定と財務諸表（損益計算書、貸借対照表）の作成を行い、成果を発表する。	
	国際経営論	輸出、輸入、海外生産、海外研究開発など、国境をこえて行なわれる国際経営は、いまや日本企業ではめずらしいことではない。本講義では、日本企業の国際経営をテーマにして、歴史、現状、課題、今後の動向などを、具体例をまじえて明らかにする。具体的には、多国籍企業の経営戦略・マーケティング、海外生産と国内産業の空洞化、国際経営マネジメントの最新事情などを中心に講義をおこなう。	
	リーダーシップ開発	本講義では、「集団に目標達成をうながすよう影響を与える」というリーダーシップの開発を目的に、リーダーとして集団に課せられた業務の割り振り・遂行をどのように行うのか、リーダーとして部下へどのような配慮をすればいいのか、という2つの視点から、それらの具体的な行動の取り方、リーダーとしての考え方、部下へのコミュニケーション方法等について、事例を織り交ぜながら学ぶ。	
	起業マネジメント論	ベンチャー企業の経営について、理論面から学ぶことを目的とする。具体的には、ティモンズやバイグレイブの起業に関する理論を学んだ上で、事業機会、起業プロセス、ビジネスモデル、ベンチャー企業のマーケティングと戦略策定、創業チーム、ベンチャー・ファイナンス等の必要不可欠な起業の要素について、具体例を使って理解する。	
	ビジネスプランニング	起業マネジメント論で、ベンチャー企業経営の基礎を学んだ上で、具体的な事業計画（ビジネスプラン）の策定を行う。ビジネスプランとは、起業機会を追求し、それを具現化する方法を明文化することで、起業家や創業チームの指針を定めると同時に、投資家について事業の内容を説明し、投資を受けるための不可欠なツールである。本講義では、数名でチームを作り、具体的な起業機会を軸に起業可能なビジネスプランを策定する。講義の最後では、起業家や投資家を招いての学内ビジネスプランコンテストを行い、優秀なビジネスプランは、学外のコンテストへの応募を支援する。	
	アントレプレナーシップ論	本講義は、起業家をゲストスピーカーとして招き、起業に取り組んだ契機や、事業化の過程で直面した問題点や対応、課題等について講義を受ける。併せて、コーディネータ教員と学生を加えた3者のディスカッションを通じて、様々な起業に関わる様々な問題への向き合い方、対応の取り組み方策について修得する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 分 野 科 目	起 業 ・ 戦 略 分 野 企業の統治と社会的責任	さまざまな企業の経営理念、法令順守（コンプライアンス）、社会的責任を果たす活動（CSR）を、多くの具体的な事例を学ぶ。そのことを通して、経営者のみならず、従業員、顧客、株主、生活者といった異なる視点から企業活動について検討することで、企業の社会における存在意義について深く理解することを目標とする。	
	中小企業経営論	日本の企業の99%を占め、全雇用者数の約7割を雇用している中小企業の経営の実態について、最近の中小企業を取り巻く経営環境と中小企業経営における課題、のほか 大多数の人が働き自己実現の場でもある「職場としての中小企業」、さらに 中小企業の大多数を占めるファミリービジネスとしての中小企業における経営戦略、の3つの視点から、具体的な事例を用いて、講義形式により中小企業経営の実態を理解する。	
マ ー ケ ー テ ィ ン グ 分 野	流通論 1	商品の生産と消費をつなぐ流通の意義と機能といった基礎理論から、サプライチェーン・マネジメントを説明する流通ダイナミクスの理論までを一通り講義する。その後、小売業態、特に、百貨店、総合スーパー、食品スーパーマーケット、コンビニエンス・ストアなどの経営原理と実態を具体的な事例を通じて学習する。さらに、流通イノベーションを続けるアパレルのSPA業態を例に、生産と流通の新しい分業関係にも焦点を当て、流通の先端で起きている事象についての理解を深める。	
	流通論 2	流通論で学習した知識とフレームワークを活用して、具体的な企業の事例をケーススタディとして学習する。マーケティングに関する卸売業、小売業、サービス業の代表的、先端的な企業のマーケティングと流通を通じて、企業のサプライチェーンや流通システムがどのように構築され、運営されているのかを実践的に学ぶ。授業の中では、グループ討論の機会を設け、学生間のインタラクション（相互作用）による啓発も重視する。	
	マーケティング論 2	マーケティング論で学習した知識とフレームワークを活用して、具体的な企業の事例をケーススタディとして学習する。マーケティングに関するメーカー、卸売業、小売業、サービス業の代表的、先端的な企業のマーケティングを通じて、売れる仕組みがどのように構築され、運営されているのかを実践的に学ぶ。授業の中では、グループ討論の機会を設け、学生間のインタラクション（相互作用）による啓発も重視する。	
	観光学概論	観光は、それをする者にとって健全で安定した生活の象徴であり、それを受け入れる観光地にとっては地域経済の活性化、すなわち地域の計画・政策の中で重要な位置を占めつつある。この講義では、観光が果たす現代的・将来の役割を重視した講義を進める。具体的には、観光の意義・定義、旅の歴史、観光資源、観光産業と政策等。また、旅を構成する要素をさまざまな見地から探り、その価値と将来性を検証し、生活への関わりや経済への影響、そして旅行の役割を確認する。	
	観光ビジネス論 A	観光ビジネスの中核をなす交通業・旅行業を中心に様々な観光ビジネスの仕組みと構造を理解する。具体的な内容は、旅行会社と旅行商品、航空業界、宿泊関連、運輸関連業界、国際交流、およびテーマパーク・レジャー施設・美術博物館・文化施設等である。また、観光ビジネスは旅行・宿泊、運輸、教育や飲食等の幅広い産業と密接に関連し、最近で医療・福祉観光や病院・医療、さらにはスポーツビジネスをも生み出している。本講義ではこれらの動きについても理解を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 学 科 専 門 分 野 科 目 マ ー ケ テ ィ ン グ 分 野	観光ビジネス論B	観光の実務を進めていく上で必要なことやその方向性について講義する。また、各地の観光誘致成功例や観光地域づくり、地域資源を集客力のある観光対象として育てていく方法等についての授業を進める。さらに、旅行の実務に直接関わる旅行業法とその施行規則のうち重要な項目について解説し、国内旅行実務と海外旅行実務について、特に国内運賃・料金、国際航空運賃・料金、出入国手続実務等について学ぶ。	
	観光マーケティング論	観光は地域における消費の増加や新たな雇用の創出など幅広い経済効果や地域の方々が誇りと愛着を持つことができる活気に満ちた地域社会の実現をもたらす。2008年に観光庁が設立され、官民を挙げて観光立国の実現に取り組む体制が必要となってきた。本講義はそれを受け、地域としての観光マーケティングの在り方を議論する。具体的には、観光・旅行者の種類、観光・旅行形態、観光・旅行の目的とニーズ、そして観光・旅行商品と販売政策・価格政策と商品訴求を販売チャネル多様化における戦略等。	
	サービスマネジメント論1	サービス商品のマーケティングとマネジメントについて、理論と応用から講義する。財としての製品とサービスの違いから始まり、サービスの経営特性について学習する。サービスのマーケティングでは、サービス商品のマーケティング戦略のフレームワークを学習する。応用編では、インターネットサービス業、外食企業、娯楽サービスなど、具体的なサービス業界の企業事例を通じて、競争優位のビジネスの仕組みについて理解を深める。	
	サービスマネジメント論2	マーケティング論やサービス・マネジメント論で学習した知識とフレームワークを活用して、具体的な企業の事例をケーススタディとして学習する。マーケティングに関するサービス業の代表的、先端的な企業のサービス・マネジメントを通じて、サービスの開発と提供の仕組みがどのように構築され、その組織が運営されているのかを実践的に学ぶ。授業の中では、グループ討論の機会を設け、学生間のインタラクション（相互作用）による啓発も重視する。	
	消費者行動論	消費者の購買行動について、理論と応用を講義する。理論編では、これまでの消費者行動研究の系譜を概観したのちに、情報処理モデルや精緻化見込みモデルなど最近の理論モデルの特徴を学習する。その後、購買意思決定プロセスに従い、問題認識から情報探索、代替案評価、決定、購買後評価の段階ごとに、その特徴を学習する。応用編では、購買意思決定プロセスを小売業の店舗内行動にあてはめ、インスタ・マーチャライジングの体系から、売場生産性を上げるための理論と技術をスーパーマーケットを初めとする具体的な事例を取り上げて理解を深める。	
	マーケティングリサーチ	経営学方法論のうち、定量的な調査手法に関する知識と技術を学習する。マーケティングにおける市場問題（顧客満足度や売上高、組織）について、因果関係を基礎に、仮説の構築から調査設計、データ収集、集計と分析までの手順を学ぶ。具体的な題材をもとに、統計ソフトを使用して集計を行い知識だけでなく、仮説思考や問題発見など論理的な思考プロセスを身につけることも狙いとする。習得した知識と技術は、レポート作成や卒業研究に役立ter。	
	eコマースとマーケティング	マーケティング論と流通論の応用分野として、インターネットを活用したマーケティングについて講義する。EC（電子商取引）の世界は、リアルな市場とどのような点で異なり、ビジネスの仕組みがどのような特徴をもつのかについて、具体的な先進事例を通じて学習する。インターネットにおけるマーケティング戦略のフレームワーク（製品、価格、プロモーション、チャネル）をインターネット市場に置き換えて、競争優位を獲得できるビジネスの仕組みについて考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 学科専門分野科目	マーケティング分野	マーケティング論の応用分野として、企業のプロモーション戦略に特化した講義を行う。広告は、プロモーション戦略の1つの手法であり、メディアであるが、最近では、統合的なマーケティング・コミュニケーションの立場から、プロモーション戦略を企業戦略のイメージに拡張する動きがみられる。また、製品戦略の1つであるブランド戦略とのかかわりも深い。授業では、ブランド戦略や統合コミュニケーションの視点から具体的な先進事例を取り上げて理解を深める。	
	生産管理論	生産とは、市場や顧客へ、良い品、安く、早く提供する経営機能のひとつである。そのために、研究、開発、設計、調達、生産、販売という一連の生産サイクルの中で、企業の人的資源、機械設備、材料などを経済的に運用させなければならない。その管理手法の基礎を理解させる。少資源国である日本は、"ものづくり"を強かに推進しなければならない。環境・エネルギー・少子高齢化に直面する技術立国日本のものづくりがいかに大切かしっかり理解させ、基本的な生産管理の知識を身につける。	
	サプライチェーンマネジメント	商品の生産と消費をつなぐ流通の意義と機能といった流通論の知識をもとに、サプライチェーン・マネジメントを説明する流通ダイナミクスの理論までを一通り講義する。コンビニエンス・ストアの商品の生産と流通、アパレルSPA企業の一貫生産販売体制、メーカーの生産体制など具体的な業界や企業に注目し、顧客起点の生産と流通がどのように編成されているのかについて、理論と事例を通して理解を深める。合わせて、サプライチェーン・マネジメント（SCM）における情報システムの役割についても学習する。	
経営資格分野	簿記特講 1	簿記論の履修を踏まえ、商品売買業で行なわれる簿記の意義と方法を講義する。また、本講義を受講することによって、日本商工会議所が主催する簿記検定3級レベルの知識の習得を目指す。具体的には、現金・預金の処理、商品売買取引、手形取引の処理、各種債権・債務の取引、その他の取引、帳簿組織、収益・費用の繰延べと見越し、決算整理、試算表と精算表、伝票会計、を取り扱う。また、各項目について、相当量の問題練習もあわせて行なう。	
	簿記特講 2 A	簿記論の履修を踏まえ、株式会社で行なわれる簿記の意義と方法を講義する。また、本講義を受講することによって、日本商工会議所が主催する簿記検定2級における商業簿記のレベルの知識の習得を目指す。具体的には、一般商品売買、固定資産、株式会社に関する会計、合併、社債、本支店会計、財務諸表、を取り扱う。	
	簿記特講 2 B	簿記論の履修を踏まえ、株式会社で行なわれる簿記の意義と方法を講義する。また、本講義を受講することによって、日本商工会議所が主催する簿記検定2級における工業簿記のレベルの知識の習得を目指す。具体的には、材料費・労務費・経費、個別原価計算、部門別原価計算、総合原価計算、標準原価計算、直接原価計算、を取り扱う。	
	小売マネジメント特講 1	マーケティング論と流通論の知識を生かせる資格として、日本商工会議所の販売士検定3級の講座を行う。販売士とは、小売マネジメントに必要な知識を体系的に備える資格であり、小売業の類型、マーチャライジング、マーケティング、ストア・オペレーション、販売・経営管理、の5つの科目について、小売業の売場担当者が知っておくべき知識について学習する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 目	経営 資格 分野	小売マネジメント特講 2	マーケティング論と流通論の知識を生かせる資格として、日本商工会議所の販売士検定3級の講座を行う。販売士とは、小売マネジメントに必要な知識を体系的に備える資格であり、小売業の類型、マーチャライジング、マーケティング、ストア・オペレーション、販売・経営管理、の5つの科目について、小売業の売場担当者が知っておくべき知識について学習する。	
		ビジネススキル特講 A	近年の情報技術の進歩発展のおかげで、パソコンによって膨大なデータを容易に処理・活用できるようになった。難しいとされてきた統計の分析も表計算ソフトで比較的簡単に実行できる。VBAとマクロを含むExcelの活用技術をマスターし、経営情報の的確かつ効果的な分析能力を身につける。日経NEEDs財務データベースは日本の主たる企業数千社の財務データを過去半世紀近く収録している。その膨大なデータを経営やマーケティングなどに必要な戦略を導きだすためのデータマイニングを経験する。	
		ビジネススキル特講 B	優秀なビジネスマンは、コンピュータ、語学、そして統計に強いといわれる。コンピュータの活用技術と統計の手法はビジネススキル特講 A で学び、ビジネススキル特講 B ではパソコンを活用したコミュニケーション能力とプレゼンテーションスキルの向上を目指す。すなわち、WORDとPowerpointの活用技術をマスターし、その高度な表現法を身につける。また、ホームページ作成能力、Webデザインの技能、各種PCアプリケーション活用能力を養い、情報発信力を身につける。	
		財務会計論	企業とそれを取り巻くさまざまな利害関係者との関わりを中心にして、企業会計の意義、種類、役割、会計学の研究対象、財務諸表の意義と種類、企業会計の理論構造、会計基準、会計原則および企業会計制度について講義する。具体的には、資産と資産会計の意義、負債と負債会計の意義、資本と資本会計の意義、損益会計の意義、損益会計の諸原則、財務諸表の意義と種類、財務諸表の作成方法：貸借対照表と損益計算書、キャッシュ・フロー計算書、株主資本等変動計算書、連結財務諸表の意義と目的、国際会計、財務諸表分析の意義と方法、等を取り上げる。	
		管理会計論	管理会計は、企業内部の経営管理にかかわる関係者に対して、意思決定に役立つ情報を提供し、経営に役立てることを目的とした会計である。本講義では、管理会計の理論と技法全体を体系的に理解することを目標として講義を行う。具体的には、財務会計と管理会計の関係、経営計画と経営統制のための会計、短期利益計画とCVP分析、予算と予算管理、業績評価、意思決定会計、経営戦略と管理会計、の各項目について理解を深めることとする。	
		原価計算論	企業活動に伴って発生するさまざまな原価の意義とその計算方法について、実際原価計算を中心に講義する。具体的には、原価および原価計算の意義、原価計算の目的、原価の諸概念、原価の要素、原価計算の形態、材料費の計算、労務費および経費の計算、単純総合原価計算、組別総合原価計算、個別原価計算、原価の部門別計算、工程別総合原価計算、部門別個別原価計算、等級別原価計算、連産品の計算、販売費・一般管理費の計算、等を取り上げる。	
		ビジネスアカウンティング	財務会計及び管理会計の基礎的理解のもと、実際に経営を行う中で発生する会計上の実務やトラブルに対処することができるようになることを目的として、実践的な講義を行う。具体的には、財務諸表の作成、予算と経営管理、利益計画の策定、税務申告、戦略マネジメントと管理会計、投資意思決定、について講義を行う。なお、本講義は、ケーススタディに基づく演習をベースにするものである。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 分 野 科 目	経営分析論	企業の実態を理解するために、経営分析を行う際の基礎的知識を身に付けることを目的として講義を行う。その中で、企業という存在をどの様に捉えることができるのかを理解する。以上の目的ののっとり、財務諸表の基本構成、収益性分析・売上高利益率、収益性分析・資本利益率、活動性分析・回転率と手持月数、安全性分析・短期安全性、安全性分析・長期安全性、付加価値分析、成長性分析、について講義を行う。また、各項目については、実際に活用される有価証券報告書を活用して、分析を行う。	
	コンピュータ会計	コンピュータを用いた会計システムの理解に必要な諸概念について講義する。特に、以下のコンピュータによる会計処理の実習を通して、会計情報システムの基本概念を理解させる。具体的には、コンピュータ会計の基礎概念 作表によるデータ処理(統計関数他) グラフ作成処理 会計データの並べ替え 会計データの抽出 現金出納帳の作成 仕訳帳、試算表作成 決算処理、財務諸表作成 総勘定元帳の作成 売掛金元帳の作成 コスト・ビヘイバーの分析 損益分岐点分析 製造間接費予算の編成 現金予算の編成 投資決定計算の諸技法 等を取り上げる。	
	事業継承と会計	企業経営を継承する際に、経営が断絶したり、事業継承によりトラブルが発生しないようにするために、事業主として必要とされる会計の知識を習得することを目的として、講義を行う。具体的には、事業主に必要とされる会計の基礎知識、間接金融による資金調達、直接金融による資金調達、資金繰計算、税務申告の基礎知識、相続と企業の評価、についてケーススタディを用いながら講義を行う。	
キ ャ リ ア 開 発 科 目	キャリア開発 1	キャリア教育の入門編として、なぜ働くのかについての意識づけや、学生時代のたな卸しや自己理解の方法、社会人に求められている社会人基礎力とはどのようなものか、業種・業界の研究のしかた、さらにインターンシップや就職活動といった就職のための手続きにはどのようなものがあるのかについて、理解を深める。これらを通じて就職を意識した学生生活を送り、今後のキャリア開発意識を芽生えさせ、自分の能力開発についての気づきを与える。	
	キャリア開発 2	社会人になる準備として、特に対面型のコミュニケーションと自分の考えを的確に伝えるプレゼンテーションによって、他者への効果的な意思の伝達と相互理解を促進するコミュニケーションスキルの基礎を養うことを目標に、グループワーク等を行いながら学ぶ。具体的には、基本的なコミュニケーションスキル、自分のコミュニケーションスタイルの特徴の把握、対面型コミュニケーションの重要性、プレゼンテーションの手法について理解する。	
	キャリア開発 3	就職活動の進め方、自己分析、業界研究の進め方、エントリーシートの作り方、合同企業説明会体験、グループディスカッションの受け方や人事担当者の講話などを通じて、キャリア支援をおこなうとともに、自己の発見、社会人になるための心構えといったキャリア開発をおこなう。また、コミュニケーションスキルの向上、自己理解と自己分析、それにもとづく自己表現を基本に、将来にわたるキャリアパスの入り口となる就職を深く考え、理解することを目的とする。	
	キャリア開発 4	就職活動を通じて認識された自己への気づきを再確認し自己分析をおこなうとともに、社会人になるために必要な社会人基礎力・マナー、グループディスカッションやプレゼンテーションなどの効果的なコミュニケーションの確認、エントリーシートを通じた自己のたな卸し方法の再確認、さらには将来のキャリアパスの第一歩となる就職についての隘路等について、グループワークや講義、将来のキャリア形成に向けた自己発見をすることを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
キャリア開発科目	インターンシップ	<p>インターンシップとは何かや業界研究の進め方、自己分析、マナー講座などのインターンシップに必要な基本的スキルを身につける。また、インターンシップを通じて開発が望まれる社会人基礎力について、その理解をするとともに、自己の社会人基礎力の強み弱みを把握し、弱み克服のための目標設定を行い、単に就業体験をだけでなく、自己の能力開発を目指す。</p>	